

クロスロード

10



特集1

日本語教育分野の活動ポイント

特集2

“スマホ”の活用法



現在の派遣国数

76 カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2019年8月末現在)

■ アフリカ地域

国名	JV	SV
ウガンダ	40	2
エスワティニ	4	1
エチオピア	25	
ガーナ	55	2
ガボン	21	7
カメルーン	27	2
ケニア	51	6
ザンビア	71	11
ジブチ	12	
ジンバブエ	6	
セネガル	37	2
タンザニア	77	3
ナミビア	13	
ベナン	45	
ボツワナ	18	
マダガスカル	37	
マラウイ	44	
南アフリカ共和国	6	4
モザンビーク	36	3
ルワンダ	48	
レソト	1	1

■ アジア地域

国名	JV	SV
インド	18	
インドネシア	14	1
ウズベキスタン	26	7
カンボジア	21	10
キルギス	31	
タイ	32	5
タジキスタン		4
中華人民共和国	7	
ネパール	55	4
東ティモール	36	
フィリピン	32	2
ブータン	16	5
ベトナム	39	16
マレーシア	18	7
ミャンマー	18	4
モルディブ	16	
モンゴル	49	
ラオス	40	1

■ 大洋州地域

国名	JV	SV
キリバス	8	
サモア	21	1
ソロモン	34	5
トンガ	19	2
バヌアツ	21	4
パプアニューギニア	35	5
パラオ	10	5
フィジー	26	4
マーシャル	5	1
ミクロネシア	14	6

■ 欧州地域

国名	JV	SV
セルビア	4	2

■ 中東地域

国名	JV	SV
イラン		1
エジプト	19	2
モロッコ	22	6
ヨルダン	38	

■ 中南米地域

国名	JV	SV	日系JV	日系SV
アルゼンチン		18	3	6
ウルグアイ		6		
エクアドル	48	6		
エルサルバドル	10	1		
キューバ		1		
グアテマラ	23	2		
コスタリカ	24	10		
コロンビア	21	13		
ジャマイカ	21	11		
セントビンセント		3		
セントルシア		16		
チリ	5	5		
ドミニカ共和国	28	7	3	1
ニカラグア		1		
パナマ	18	1		
パラグアイ	52	2	9	3
ブラジル			71	19
ペリーズ	16			
ペルー	48	4		
ボリビア	39	1	3	1
ホンジュラス	29			
メキシコ	2	9		

■ 合計

	JV	SV	日系JV	日系SV	小計
派遣中 (男性/女性)	1,821 (783/1,038)	252 (178/74)	89 (33/56)	30 (11/19)	2,192 (1,005/1,187)
累計 (男性/女性)	45,286 (24,065/21,221)	6,510 (5,263/1,247)	1,503 (575/928)	545 (252/293)	53,844 (30,155/23,689)

JV = 青年海外協力隊

SV = シニア海外ボランティア

日系JV = 日系社会青年ボランティア

日系SV = 日系社会シニア・ボランティア (単位: 人)

クロスロード

2019 OCT
Contents

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	26
コンピュータ技術	4、15
廃棄物処理	24
青少年活動	36
ラグビー	4
PCインストラクター	4、14
日本語教育	1、6、8、12、13、28
体育	20、35
小学校教育	18
学芸員	25
日系日本語学校教師	10、28
作業療法士	16、22

■国別索引	掲載ページ
インドネシア	4
エクアドル	36
エチオピア	18
ガボン	22
コスタリカ	8
スリランカ	20
セルビア	1
タンザニア	14、15
ドミニカ共和国	25
バングラデシュ	26
ブラジル	10、28
ブルガリア	35
ベトナム	6、16
ボツワナ	24
マラウイ	4

■出身都道府県別索引	掲載ページ
宮城県	24
茨城県	25
栃木県	18
千葉県	26
石川県	8
福井県	16
静岡県	6、35
愛知県	14、36
京都府	10
和歌山県	22
沖縄県	20

【凡例】

- ① JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん(ウガンダ・青少年活動・2019年度1次隊)

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

※「青年海外協力隊」以外のJICA海外協力隊（「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニアボランティア」）の方々には、括弧内の冒頭に「SV」「日系JV」「日系SV」と記しています。

- ② JICAの「企画調査員（ボランティア事業）」については、「VC」と表記しています。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：S+M DESIGN FACTORY

レイアウト：S+M DESIGN FACTORY

印刷・製本：弘報印刷(株)

4

JICA Volunteers' NEWS

- ▶日本人初！ アジア選手権に出場するインドネシア男子代表のコーチに就任（インドネシア）
- ▶IT投資を活性化させる社会的イベントを目指して「タイピング大会」を実施（マラウイ）

特集1

日本語教育分野の活動ポイント

6

CASE 1 日系企業就職希望者への指導

浅野鉄也さん（SV/ベトナム・日本語教育・2016年度4次隊）

8

CASE 2 大学生への指導

竹田瞳美さん（コスタリカ・日本語教育・2017年度1次隊）

10

CASE 3 日系日本語学校での指導

大野渚美子さん（日系JV/ブラジル・日系日本語学校教師・2016年度派遣）

12

活動Q&A集

特集2

“スマホ”の活用法

14

CASE 1 ダウンロードサイト

古川 愛さん（タンザニア・PCインストラクター・2016年度4次隊）

16

CASE 2 SNSのグループ機能

竹澤藍子さん（ベトナム・作業療法士・2016年度4次隊）

18

CASE 3 SNSのビデオ通話

小野口仁美さん（エチオピア・小学校教育・2017年度1次隊）

20

CASE 4 動画撮影

高里 樹さん（スリランカ・体育・2017年度1次隊）

22

“失敗”から学ぶ

野口彩夏さん（ガボン・作業療法士・2016年度4次隊）

24

希少職種図鑑

- ▶廃棄物処理 山本匡位さん（ボツワナ・2016年度4次隊）
- ▶学芸員 石川雅啓さん（ドミニカ共和国・2015年度3次隊）

26

JICA Volunteer's Before ▶ After ~人生を変えた2年間~

農家民宿 経営者 川野歩美さん（バングラデシュ・コミュニティ開発・2013年度2次隊）

28

OB・OG匿名座談会

日本語教育分野篇

30

JICA海外協力隊のプチテクガイド

自分で髪の毛を切ってみよう/筋トレで健康に!/あるもので日本の味

32

INFORMATION

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「原動力」

35

協力隊@TOKYO 2020



インドネシア代表選手たちに戦術を説明している比嘉さん

大会参加の流れ	
〈4カ月前〉 コーチ就任	15人制ラグビーインドネシア代表コーチ就任。
〈2カ月前〉 選手選考	首都ジャカルタへインドネシア全土から選手を集めて代表選手選考会を開催。
〈2週間前〉 初会議	チームスタッフの顔合わせ、情報共有。
〈4日前〉 合宿	合宿スタート。
〈当日〉 大会開催	アジア選手権大会出場。

日本人初！ アジア選手権に出場する インドネシア男子代表のコーチに就任

Indonesia

文 = 比嘉 昂 さん (短期/インドネシア・ラグビー・2018年度1次隊)

私は2018年7月から19年7月まで、流通経済大学とJICAの大学連携プログラムでインドネシアラグビー協会へ派遣されました。

活動開始当初から、休む暇なくラグビー普及活動に取り組みました。訪問した地域は全部で8州、訪問した学校と参加者は32校5275人。そして普及活動の合間に、現地のラグビークラブの選手に対してコーチングも行いました。

ラグビーは、人と人がぶつかり合うときに鳴り響く「音」が離れた場所まで聞こえてくるほど、激しい身体接触を伴うスポーツです。しかし、インドネシアでは、激しい身体接触を伴う練習を省くチームが多く、理由は「怪我をするかもしれないから」ということでした。その考えを変えるコーチングが一番苦労しました。しかし、



チームに起きた問題について話し合うインドネシア代表選手たちと比嘉さん

勝つには激しい身体接触を伴う練習を行う必要があったため、心からその必要性を選手たちに訴え続け、練習していました。

4月上旬、これまでの活動成果が認められ、日本人として初めてアジア選手権に出場するインドネシア男子代表のコーチに就任しました。試合は、2カ月後となりました。私は流通経済大学ラグビー部で培った経験を生かし、勝つと意気込んでいました。

しかし、日本では起こるはずのない、資金不足や練習不足による問題が次々に発生しました。それでも「インドネシアでは当たり前になることさ」と聞き直して練習に取り組み選手たちの姿から、インドネシアでの生き方を学び、解決策を選手と共に考えながら試合へ挑みました。

試合前の国家斉唱。グラウンド上に凛々しく横一線に立つインドネシア代表選手たちを見ながら、インドネシアラグビー代表コーチとして、インドネシア国歌を歌いました。選手たちの誇らしい顔を見ながら、インドネシアへの愛着心のせいか、心に込み上げてくるものがありました。

結果は、大会を通じて勝利なしでした。まだまだラグビーに関する知識と人として学ぶことが多いと感じました。しかし、異国の地で信頼を得て代表チームを任せてもらえたという嬉しさは、試合前の国歌斉唱のときに込み上げてきたものに現れました。同時に、多くの仲間を1年間でつくれたと振り返ることができました。

※ 流通経済大学とJICAの大学連携プログラム…2019年のラグビーワールドカップ日本大会開催に向け、JICAは13年より日本ラグビーフットボール協会(JRFU)と「JICA-JRFUスクラムプロジェクト」を実施。アジア地域にラグビー職種のJICA海外協力隊を派遣している。その一環としてアジア地域のラグビー普及促進のために流通経済大学からインドネシアへ大学連携事業による長期・短期を組み合わせたJICA海外協力隊派遣を実施している。

開催の流れ	
〈5カ月前〉 企画	隊員の発案により企画立案開始。
〈4カ月前〉 開催地検討	大会スポンサーと開催地探しを開始。
〈3カ月前〉 企画・広報	大会スポンサーを決定。大会の詳細を固め、広報資材作成開始。
〈1カ月前〉 広報・募集	大会実施の広報と参加者の募集を開始。
〈当日〉 開催	タイピング大会を実施。
〈2週間後〉 報告	大会実施報告書を作成し、各関係機関へ配布。



試合中の様子。試合が始まると生徒たちは黙々とタイピングをして集中していた

IT投資を活性化させる社会的イベントを 目指して「タイピング大会」を実施

Malawi

文 = 安富かなえさん (PCインストラクター・2017年度3次隊)、井上ちよよさん (PCインストラクター・2017年度3次隊)、坪井沙由理さん (コンピュータ技術・2018年度2次隊)、上杉祐介さん (PCインストラクター・2018年度2次隊)

※派遣国は全員マラウイ

私たちは、マラウイ唯一の商業都市であるブランタイヤ市で、中等学校でのコンピュータ教師や大学のシステム部でエンジニアとして活動しています。マラウイにおけるIT分野は、産業においても教育においてもまだまだ発展途上だと感じています。そこで、IT技術の発展のきっかけとして、これからのマラウイ社会を担う学生の技術向上を目指し、コンピューター操作の基礎であるタイピングの早さと正確性を競う大会を実施しました。

イベントの開催には、開催地の選定、企画立案、スポンサー探し、教育機関へのプロモーション活動と、いくつもの課題がありました。また、今後も継続して開催したいという思いもあり、地元のコミュニティグループと協力し、さまざまなマラウイ人の意見を大切にして、一緒にこのイベントをつくり上げました。



大会前の準備をする隊員たち。「社会における女性へのエンパワーメントが求められている中、多くの女子学生が大会に参加してくれたのは嬉しいことでした」と隊員は大会を振り返る

スポンサーには地元社会経済への影響力も考慮して国内一般企業からスポンサーを探し、大会会場は市内にある国立大学内のコンピューターラボに決まりました。さらに、広報にはSNSやポスターなどを使用して、マラウイ全土に大会の告知と参加者を募りました。各方面から多数の問い合わせをいただきましたが、こちらの開催能力も踏まえ、9つの学校から34人の学生が参加する大会となりました。

大会が始まる前は緊張で落ち着きのない生徒もいましたが、いざ始めると真剣な面持ちでタイピングに取り組みました。また、マラウイ医科大学ICT部門長による講話では、IT技術とマラウイ社会の発展の可能性について話され、生徒たちは熱心に聞き入っていました。

改善点も数多くありましたが、大会後のアンケートでは生徒や関係者から好意的な回答を数多くいただきました。また、大会後も継続してタイピングの練習を続ける生徒がいるなど大会実施の影響力を感しています。さらに、今回参加しなかった生徒からも次回開催を熱望する声をいただいています。この大会は来年の実施も予定しており、次回では複数都市開催、将来的には全国大会にできればと思っています。

このようなイベントによって、生徒や社会にITへの関心を持ってもらうことで、マラウイのIT技術の発展につながることを願っています。

日本語教育分野の活動ポイント

海外における日本語教育では、「学習者の周囲にネイティブが少ない」「学習者が日本語を使う機会が少ない」といった困難がある。そうした困難に協力隊員はどのように対処していくべきか。学習者のタイプが異なる各種活動事例をおして、ポイントを整理する。

事例 1

日系企業就職希望者への指導

現地教員の能力強化を図り、日本語学科のレベルを底上げ

浅野鉄也さん（SV/ベトナム・日本語教育・2016年度4次隊）の事例

大学の日本語学科に配属された浅野さん。担当した授業のなかで、現地教員の授業に不足していた「実践的な日本語能力を伸ばす」という要素の拡充を図る一方、彼らの日本語能力や日本語の指導力の向上支援にも力を入れた。

* 日本語能力試験…(公財)日本国際教育支援協会と(独)国際交流基金が主催する、日本語を母語としない人たちの日本語能力を測定し、認定する試験。N1からN5まで5段階(N1がもっとも高いレベル)の試験が設けられている。

浅野さんが配属されたのは、ベトナム最大の都市、ホーチミン市にある国立大学の外国語学部日本語学科。学生数が約500人という規模の学科だ。日本語能力試験のN3に合格することが卒業の条件のひとつとされており、卒業生の約8割は日系企業に就職する。同学科では、彼らを対象にした授業のほか、第二外国語に日本語を選択した他学科の学生への授業も実施。配置されていた常勤の教員は4人で、いずれも10年前後のキャリアを持つベトナム人だった。浅野さんの活動の柱となったのは、非ネイティブである彼らが不得意とする「会話」や「作文」、「日本文化」の授業を担当すること、および彼らのさらなるスキルアップに向けた指導を行うことだ。

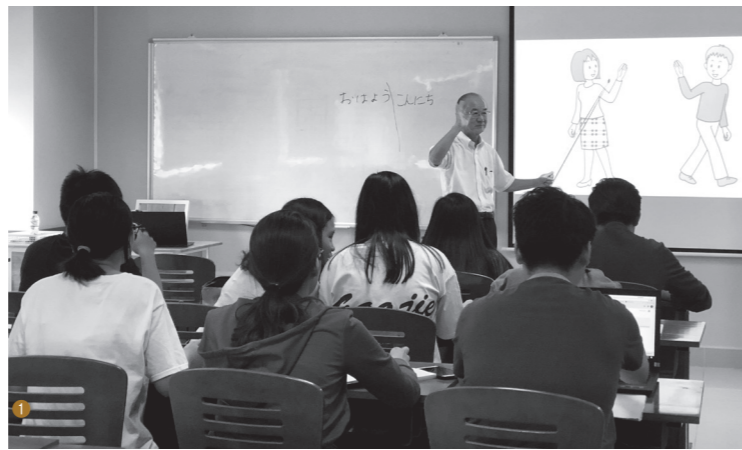
実践的な日本語能力を伸ばす授業

担当する授業で浅野さんが留意したのは、「実践的な日本語能力」を伸ばす工夫をすることだ。卒業生が就職した日系企業から、「より高い会話力を学生に身につけさせてほしい」というリクエストが配属先に寄せられるような状態だったからだ。

従来、ベトナム人教員が行っていた「会話」の授業は「講義形式」がメインで、定型文や単語を暗記させる「インプット」に時間が費やされていた。わずかに設けられていた「アウトプット」の時間も、「教員がフレーズの発音の手本を示し、学生がそれをリピートする」、あるいは「教科書にある会話の例文を2

人1組で読み上げる」など、文型を「覚える」だけの練習に留まっていた。

そうしたなか、より実践的な練習として浅野さんが授業に取り入れたのは、「インタビュ型」のロールプレイ。学生がペアやグループになり、たった今学んだばかりの文型を使いながら、「例文」を離れて自由に質問し合うものだ。たとえ文型や単語がやさしいレベルであっても、相手に伝える内容を自分で考えながら、覚えたばかりの文型や単語を適切な表現へと組み合わせることは難しく、その分、意思疎通が叶ったときの達成感は大い。そのため、学生たちは「インタビュー」に嬉々として取り組むようになり、会話での表現力がみるみるついていくのだった。



①担当していた「会話」の授業で、挨拶のシーンのフレーズを指導する浅野さん
②「日本文化」の授業で学生たちが描いた「年賀状」
③日本語授業を担当するベトナム人教員たちを対象に開いた「勉強会」の終了後の様子

教員たちの能力向上に向けた支援

浅野さんは「会話」以外の授業でも、「実践的な日本語能力」を伸ばす工夫をした。たとえば、「日本文化」の授業では「日本の旅行を楽しむ」という単元を設定。日本語で書かれた日本の鉄道の時刻表をインターネットで調べながら、東京駅から出発する旅行の計画を立てるといった内容だ。そのなかでは、学生が「旅行者役」と「店員役」に分かれ、「浅草で土産物を買う」という状況を即興で演じる「ロールプレイ」も実施。日本語を実際に使う場面を疑似体験させるこれらのアクティビティは、やはり事後に行った学生たちへのアンケートで評価の高いものだった。

配属先からの要望が強かったことから、浅野さんはベトナム人教員たちへの技術指導にも力を入れた。浅野さんはまず、普段のやりとりを通じて彼らの日本語能力をチェック。すると、彼らは日本語を使って日本人とコミュニケーションをとる機会が少なかったこともあり、会話は成り立つものの、ネイティブとは異なる発音が身についてしまっていることもあった。

その後、浅野さんはベトナム人教員たちの授業を見学。そこで見えた課題は、「文法積み上げ式」と呼ばれる従来の指導方法がとられていた点だ。これは、優しいものから順に文型をひとつひとつ「覚え」させるもの。それでは実践的な日本語能力が養われないうちの反省から、日本国内の日本語教育では現在、「買いたいものについて店員に質問する」などの場面を設定し、そうした場面で「使える」

日本語を指導していく「場面シラバス」による「Can-do方式」が注目されつつある。以上の観察から、浅野さんはベトナム人教員たちへの技術指導は、「彼ら自身の日本語能力の向上」と「彼らの日本語教授能力の向上」の2本柱で進めることとした。

● **ウェブサイトの紹介** 浅野さんは、ベトナム人教員たちの発音の誤りを直接指摘することは避けた。彼らのプライドを傷つけない、自信を失わせてしまったりするだろうと考えたからだ。その代わりに、手軽に発音の確認ができるウェブサイトを紹介。授業の前にチェックするよう勧めてみると、それを実践している様子が、彼らの発音の改善からうかがえるようになった。

● **「勉強会」の開催** 浅野さんはベトナム人教員たちの日本語教授能力の向上を目的に、半月に1度のペースで勉強会を開催。彼らの指導方法が旧来のものであることを説明し、Can-do方式への転換を促した。

● **SNSで相談に対応** ベトナム人教員の中には、「学生からの質問に自信を持って回答できない」と打ち明ける人もいた。特に苦戦している様子だったのは、文法の応用に関する質問だ。そこで浅野さんは、SNSを使い、ベトナム人教員から日本語教育に関する相談を随時受け付け、回答していった。

浅野さんがベトナム人教員たちに与えた以上のような刺激に、彼らは「さらに進歩しなければ」との自覚が強まったようだった。その自覚さえあれば、インターネットで日本語に関する情報を得るチャンスが多くなっているなか、彼ら自身の力で学科のレベルをさらに上げていくことも期待できる。

全体の状況を把握

日本語教育分野の場合、現地教員の育成など、その国が全体としてどのような方針で動いているかを早めにつかむのが重要かと思います。そうすることで、配属先にあるさまざまな課題のうち、自分に解決可能なものがどれなのかが見えてくるからです。



浅野鉄也さん

Profile

1951年生まれ、静岡県出身。慶應義塾大学を卒業後、地方公務員として働く。2014年、退職を機に日本語教師の道に。17年3月、SVとしてベトナムに赴任。19年3月に帰国。現在は、SV時代の活動先大学から要請を受け、直接の雇用契約により日本語教師として勤務。

活動の概要

ホーチミン市オープン大学の外国語学部日本語学科に配属され、主に以下の活動に従事。

- 学生への日本語授業の実施（主に初・中級の会話、作文、日本文化関係）
- 現地教員に対する日本語教授法の指導
- 学内外の行事への支援（日越交流、スピーチコンテストなど）

後援隊員へひとこと

事例2

大学生への指導

日本語教育の盛り上げを目的に 日本語学習者の「運動会」を開催

竹田瞳美さん（コスタリカ・日本語教育・2017年度1次隊）の事例

竹田さんの配属先は、首都近郊にある国立大学の文学哲学部文学言語学科。選択制の第二外国語のひとつとして日本語授業が開講されており、全学年で計120人程度の学生が選択していた。レベル別に6つのクラスが設けられており、もっとも易しいレベルのクラスから受講し始め、中間試験や期末試験で及第点を取ると、次の学期にはひとつ上のクラスに進めるというシステムになっていた。竹田さんのメインの活動となったのは、初級の3クラスの授業を担当すること。いずれのクラスも学生数は約30人だ。

レベルに応じた学生指導

竹田さんが担当したクラスは、日本のマンガやアニメを通じて日本や日本語に興味を持った学生が大半。初級の段階から仕事や留学で活用することを目的に日本語を学習する学生は稀だった。一方、授業で使われていた教科書は、『みんなの日本語』をベースにしたもので、文法を優しいものから順にひとつひとつマスターしていく「文法積み上げ式」の構成になっていた。

もっとも高いレベルのクラスで勉強中のもしくはそれを修了した学生の希望者で、成績により、1人には大学から奨学金も出る。日本語教師として働くことを目指せるレベルの学生に「インターンシップ」のような体験を積みませ、コスタリカ人の日本語教師の増加を後押ししようとの意図で始まった制度だ。実際、学生アシスタントを経験した卒業生の多くが、コスタリカ国内の民間の日本語学校で日本語教師として活躍し始めている。

竹田さんは、この学生アシスタントへの技術指導にも力を入れた。彼らに入ってもらった授業の前には、かならず打ち合わせを行い、「この文法は、あなたが教えてください」などと担当してもらった役割を明示。事前に準備をしたうえで授業に挑んでもらい、授業の後には彼らの指導方法について気づいたことを伝え、改善につなげてもらった。

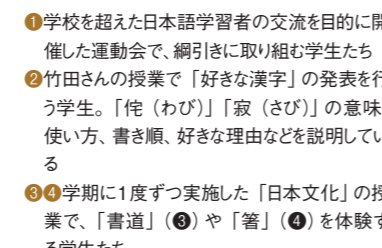
現地の日本語教師の主体性向上に向けて

首都にあるコスタリカ大学にも、代々、日本語教育隊員が派遣されてきた。竹田さんが着任早々に着目したのは、せっかくながら両大学に日本語教育隊員が派遣されているのに、それぞれの日本語学習者が接点を持つ機会がないことだった。日本が好きでコスタリカ人たちのネットワークが広がれば、両国での日本語教育もいっそう盛り上がるはずだと考えた竹田さんは、そのきっかけづくりとなる催しを、コスタリカ大学に派遣されていた日本語教育隊員とともに企画。両大学の日本語学習者による「運動会」だ。

教え子たちにとって、文法の知識を確実にすることよりも、いつか日本人の友人ができたときなどに楽しく話ができるよう、実践的な会話の能力を養うことのほうが重要ではないか。そう考えた竹田さんは、教科書に沿った授業を展開しつつ、「実践的な会話の能力」を育てる指導をなるべく多く取り入れるようにした。そのひとつの方法が、『一番好きな日本の●●』を発表する時間』の導入だ。担当する授業で毎回、いずれかの学生に「一番好きな漢字」や「一番好きな日本の文化」を発表するコーナーを設けた。日本語での発表を原則としたが、それが難しい場合には、スペイン語での発表も可とした。「日本が好き」という共通項で結ばれた学生たちであるため、このコーナーは発表する学生もそれを聞く学生も目の輝きが変わり、なんとか日本語で発表できるようになると、日本語学習への熱も高まっていくのだった。

日本語教育隊員が代々派遣されてきた配属大学では、学生が自分の授業の合間を縫って日本語教育隊員の授業に「学生アシスタント」として入り、スペイン語による説明などのサポートをする制度が10年ほど前から続いていた。コスタリカには、同国の日本語教育の活性化を目的に結成された「日本語教師会」という組織がある。主なメンバーは、日本語教育隊員など同国で日本語教育に携わる日本人と、コスタリカ人の日本語教師だ。会では従来、日本語弁論大会の開催などが行われてきたが、そうした活動では、「日本語能力はネイティブには及ばない」との引け目から、コスタリカ人メンバーは参加に消極的だった。そこで竹田さんたちは、コスタリカ人メンバーが会の活動に積極的にかかわるきっかけにしようと考案、「日本語」とは離れた催しである「運動会」を会の主催とした。

初回の開催は、竹田さんの着任の約3カ月後。両大学からそれぞれ15人ほどの学生が参加し、公園を会場に「パン食い競争」や「綱引き」など、日本の運動会の定番種目を大学対抗で戦った。運営のノウハウは、竹田さんたち日本人メンバーが提供。学生アシスタントたちにも、初めての運動会を体験してもらった。参加した学生たちは、「運動会」という日本特有のイベントに触れたことから、日本語学習への意欲を高めたようだった。その後、この運動会の評判が広がり、コスタリカの大学に在籍する日本人留学生も参加して、「日本語学習者が日本人と交流する機会」の創設という新たな意義を加えた「日本語教育関係者の運動会」が、大使館や現地の日本人学校の協力のもと、竹田さんの任期中に2回実現する。日本語教師会のコスタリカ人メンバーが回を追うごとに運営の主力となるように注力したこと、彼らの力により、同国の日本語教育界の伝統として「運動会」を続けていく可能性も高まった。



1 学校を超えた日本語学習者の交流を目的に開催した運動会で、綱引きに取り組む学生たち
2 竹田さんの授業で「好きな漢字」の発表を行う学生。「侘（わび）」「寂（さび）」の意味、使い方、書き順、好きな理由などを説明している
3 4学期に1度ずつ実施した「日本文化」の授業で、「書道」(3)や「箸」(4)を体験する学生たち

後援隊員へひとこと

できることを継続して
任期中は、「後任隊員は来るのか」など、先が見えないことによる迷いや不安を持つことがあるかもしれません。しかし、2年間という時間は限られています。「これはやるべきだ」と感じた目の前の活動に全力で取り組むことが何より重要ではないかと思えます。



竹田瞳美さん

Profile

1991年生まれ、石川県出身。2014年に京都外国語大学を卒業し、日本語教師としてベトナムの日本語学校に就職。17年6月、協力隊員としてコスタリカに赴任。19年6月に帰国。

活動の概要

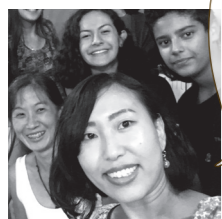
- ナショナル大学（エレディア県）の文学哲学部文学言語学科に配属され、主に以下の活動に従事。
- 日本語授業の実施
- 学生アシスタントへの指導
- 日本語教師会の活動への参加（日本語能力試験や弁論大会の運営支援、日本語学習者による運動会の開催）
- 原爆についての講演会の開催

大学で日本語の授業を担当した竹田さん。学校を超えて日本語学習者が交流する機会をつくることを目的に「運動会」を開催したところ、現地の日本人留学生も参加する大規模な定例行事へと発展していった。

後輩隊員へ
ひとこと

根気よく擦り合わせを!

日系社会での活動で重要なことは、日系人をはじめとする関係者といかに良い関係を築くことだと思います。彼らが従来継承してきた社会づくりの流れを尊重しつつ、「プラスα」として貢献できる変化を探ってみてください。



大野渚美子さん

Profile

1989年生まれ、京都府出身。横浜国立大学を卒業後、金融系企業に入社。2015年、国際交流基金アジアセンターが実施する「日本語パートナーズ」派遣事業でインドネシアに赴任。16年6月、日系社会青年ボランティアとしてブラジルに赴任。18年6月に任期を終えた後、日本の商社がブラジルに置く事務所に勤務。

活動の概要

- N.S・ラーモス日本語学校（サンタカタリーナ州）に配属され、主に以下の活動に従事。
- 日本語授業の実施
 - 日本文化の授業の実施（書道、折り紙、歌など）
 - 移民学習の実施
 - 「日本語キャンプ」の企画・運営
 - 日系社会の活動への参加（和太鼓クラブ、運動会、夕食会など）



①アシスタントの教員（左）とともに、配属先で日本語の授業を行う大野さん（右）



②③日系1世の人たちを講師として招いて行った「日本語キャンプ」での日本文化の体験学習。②は、日系1世の講師（左）から日系3世の生徒が教わる「華道」の体験学習。③は、日系1世の講師（左）から日系3世の生徒が教わる「茶道」の体験学習



事例3

日系日本語学校での指導

変わりゆく日系社会の世代と世代をつなぐ「日本語キャンプ」を開催

おののなみこ
大野渚美子さん（日系J-Vブラジル・日系日本語学校教師・2016年度派遣）の事例

大野さんが派遣されたのは、戦後に日本人の入植が始まったラーモス移住地。その日系団体「N・S・ラーモス日伯文化体育協会」が運営する日本語学校「N・S・ラーモス日本語学校」が配属先だ。大野さんの着任を受けて生徒の追加募集が行われ、着任後まもなく生徒数は30人程度の水準になった。同移住地には当時、約30家族の日系人が暮らしており、生徒の約3分の2はその子弟たち。大半が、すでにポルトガル語が母語となっている日系3世だ。残りは、日本に興味を持つ地域の非日系人だった。生徒の年齢は小学校低学年から成人までと幅広く、日本語能力にも初級から上級までばらつきがあった。

従来、授業をメインで担当し、大野さんのカウンターパートとなっていたのは、日本滞在歴もあって流暢に日本語を話す日系2世の女性（以下、CP）。ほかに、4人の日系2世がボランティアでアシスタントを務めていた。いずれも日常会話程度の日本語が話せるという理由で配属先から依頼を受けた保護者や関係者だ。

生徒を年齢層やレベルにより8クラスに分け、1コマ90分の授業がそれぞれ週に2コマう事だ。その点は、生徒たちにとっても同じはずだと大野さんは思い当たった。「楽しい時間を過ごせる」というだけでなく、生徒が自身の日本語能力の向上を感じられる機会をつくらなければ、彼らの日本語を学ぶ意欲は中途半端なものに終わってしまう。そう考えた大野さんが、「日本語能力の向上を感じられる機会」を創出するために「た策のひとつは、毎回の授業への「復習テスト」の導入。もうひとつは、保護者会の半年後に開催が予定されていた「日本語能力試験（P6の注釈参照）」を生徒たちの達成目標に据えて授業を行うことだ。

日本語能力試験の受験を希望したのは、中学生から成人までの計7人。いずれの生徒も初めて挑戦するものであり、受験したのはもっともやさしいレベルのN5である。受験のハードルとなったのは、遠方にある試験会場までの交通費と宿泊費の捻出方法だった。大野さんたち教員陣は保護者の協力を仰ぎ、地域のイベントで生徒たちとともに「うどん」などを調理して販売。その売り上げを足しにすることに、受験が叶った。

日本語能力試験の結果は、7人中3人が合格。彼らは案の定、日本語を学ぶことへの意欲をにわかに高め、日系社会の次世代を担う人材を日本に招へいして研修を行うJICAのプログラム「日系社会次世代育成研修」への応募を試みるなど、次の学びのステップを自ら開拓するようになったのだ。

「日本語キャンプ」を開催

前述の保護者会では、「生徒たちが教室の

ずつ実施されていた。現地語のポルトガル語を媒介言語として使う「間接法」で授業が行われており、大野さんは着任当初、授業で使いこなせるだけのポルトガル語の力がなかったことから、CPやアシスタントたちとのチームティーチングで授業を実施した。

日本語能力そのものの向上に向けて

大野さんが当初、配属先から要望されたのは、生徒が「日本文化」に触れる機会を積極的に提供する役目だ。日本文化に触れることは、日本語学習の意欲の向上にもつながると考えた大野さんは、配属先の要望にこたえようと、書道や折り紙など日本文化を楽しく学べる授業の実施に力を入れた。

しかし、任期の半ばに転機が訪れる。自身のそれまでの活動の振り返りと、以後の活動の方針立てについてCPやアシスタントと話し合うタイミングで、配属校で定期的に行われていた「保護者会」が開催された。そこでわかったのは、生徒の日本語能力がどれほど伸びているのかが保護者には見えにくく、学校に通わせる意義を彼らは確信しづらいとい

外でも日本語を話す機会を増やすことができないう意見も出た。そうした機会の設定を、配属校の継続的な仕組みとして定着させようとの目論見で大野さんが任期の終盤に企画したのは、1泊2日の「日本語キャンプ」。生徒たちが、日本語を母語として生きてきた日系1世たちとあらためて交流を図る目的の催しだ。大野さんはそれまでの日系人との付き合いのなかで、日系人の家庭では、日本語を母語とする祖父母が身近にいるにもかかわらず、その環境が日本語学習に生かされておらず、家庭内ではむしろ継承語教育は難しいものであるということを知っていた。両者をつなぐ催しを定例化することで、生徒たちが家庭のなかで祖父母と日本語を使ってコミュニケーションを活発にしたいと、大野さんは考えたのだ。

キャンプに参加した生徒は、小・中学生を中心とする14人。ここでも保護者たちに手を借り、1日目の夜は、手作りのカレーを食べるキャンプファイヤーを実施。あくる日には、日系1世の人たちに講師となってもらい、「華道」や「茶道」などを生徒たちが体験した後日、生徒たちは講師となってくれた日系1世の人たちに日本語のお礼状を贈った。

「来年も日本語キャンプはあるのですか」。生徒たちがそう尋ねてくるほど、彼らは「新たな出会った日本」に楽しさを感じたようだった。日本から海をわたってきた日系1世、大野さんの教え子である日系3世、そしてその保護者にあたる日系2世たち。大野さんが果たしたのは、「外部者」だからこそ可能な、彼らの間の関係をつなぎ直す「潤滑油」としての役割にほかならない。

日系日本語学校に配属され、日本語の授業を担当した大野さん。日系3世の生徒たちと、彼らの祖父母にあたる日系1世の世代とをつなぐことを目的に、「日本語キャンプ」を開催した。

Q1

生徒たちの日本語学習に対するモチベーションの高め方について
中等教育機関で活動する日本語教育隊員より

中等教育機関に配属され、選択科目である日本語の授業を担当しています。生徒たちが卒業後に日本語の能力を生かせる仕事に就ける可能性はほとんどないのが現状であり、生徒たちにとって日本は身近な国というわけでもありません。そのように、日本語を学ぶ意義が曖昧な生徒たちに、日本語を学ぶモチベーションを高めてもらう方法があれば教えていただきたいです。

A1

学習意欲を高める方法を4つの領域(①注意(Attention)②関連性(Relevance)③自信(Confidence)④満足感(Satisfaction))で整理したARCSモデルでは、学習者の好奇心を刺激し、関心を持たせること(①)、学習を学習者の経験や知識と関連付けること(②)、学習が成功するように手助けすること(③)、学習者が学習の成果を実感できる機会を提供すること(④)が学習意欲を高めるのに効果的だとしています。これを日本語学習に当てはめてみると、以下の方法などが考えられます。

- ・「何だろう」と思わせる写真や映像を使う
- ・授業の始め方、進め方にバラエティを持たせ、パターン化することを避ける
- ・生徒が得意な分野や生徒の身近なことに配慮した、また、生徒が知っていることを利用し

た文例や会話例を提示して、学習負担を軽減する

- ・既習項目を取り入れて、過去の学習が次の学習を可能にしていることを生徒に実感させる
- ・やさしいものからむずかしいものへ生徒が着実に小さい成功を積み重ねられるようにする
- ・なぜできないかを生徒自身が確認できるようにする

・SNSなどのツールを利用して生徒が学校や自分の国について日本語で発信するなど、学習したことを使う場を作る

もう一つは、「遠い日本を近づける」ことです。日本を身近に感じられるようにするために、百科事典的な日本ではなく、同じ年頃の日本人生徒がどんなことに興味を持ち、どんな生活をしているのかなどを、文例、会話例、読解文で取り上げます。例えば、中高校生のかばんの中身、勉強している科目、将来になりたい職業、興味があること、悩みなどを、学習する語彙や文型に応じて取り上げます。教師自身、または身近な人のライフストーリーをシリーズで紹介することもできます。さらに、学習者の自国にある日本や日本のもの(街で目や耳にすること、スーパーで売っているものなど)、日本について知りたいことを調べさせるなど、学習者自身が学習内容を選択できるようにするのも効果的です。

実践的な日本語能力を高める方法について

大学の日本語学科で活動中の日本語教育隊員より

Q2

大学で第二外国語として日本語を専攻する学生を対象にした授業を担当しています。生徒たちの多くは、卒業後、日本への留学や日系企業への就職を希望しており、高い学習意欲を持っていきます。しかし、彼らが授業以外で日本語を使うチャンスは少なく、会話の力を伸ばすのに苦労しているようです。ネイティブ話者が少ない環境で、実践的な日本語能力を高めるにはどのような方法があるでしょうか。

A2

日本語を使う機会が少ない、ネイティブ話者が少ないという海外の状況で会話能力を上げるためにできることを二つ紹介します。

●身近に日本語会話の相手がいることを実感させる

教室で、教師の指示、学習者からの許可求め、要望提示などを日本語で行えば、それは「real communication」(現実の場面でのやりとり)をしていることになり、学習が進むにつれて、遅刻の理由を述べたり、宿題を忘れた言い訳をしたり、また、教師が知りたいことを学習者に聞いたりすると、教師との間で「real communication」ができます。クラスメイトとも同様です。海外では学習者の母語が同じことが多く、日常的な会話をする上で日本語を使う必然性はありませんが、「今日のお昼、何食べる?」「ちょっとペン貸してくれる?」と

いうようなやりとりを、母語でできるが日本語でもできるということを意識させていけば、学習者が自ら会話の機会を生み出すことができます。ネイティブ話者だけが会話の相手ではないということです。

●ネイティブ話者のやりとりを真似てみる

「real communication」では、伝えたいことを表現するために場面に応じて必要な語彙や文型を話者自身が選択し、それを伝えた相手の反応を理解し、さらにそれに応えるということをしています。日本人がどのような場面であろうやりとりをするのかを把握しておくことは、学習者が実際の場面に遭遇したとき、相手の発言を推測する助けになりますし、自分が表現を選択する際の参考にもなります。その意味で、日常設定の映画やTVドラマを視聴し、発話をディクテーションして整理したり、聞いたことをシャドーイングしたりすることも会話力を伸ばす助けになります。

現在は、ネット上で学習の参考になるリソースを探ることができます。また、会話のパートナーを見つけて実際にやりとりすることも可能な時代になりました。教師は、そういう便利なツールを活用して日本語でやりとりする機会を作り出すのを手助けすることもできるでしょう。

協力隊技術顧問が回答
活動Q&A集

JICA海外協力隊への技術支援を目的に、分野ごとに配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。

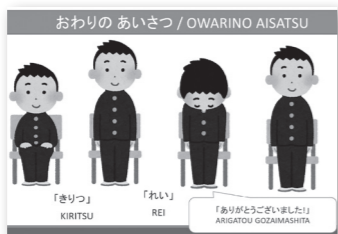


回答者
つばやま ゆ み こ
坪山由美子さん
●JICA海外協力隊技術顧問
(担当分野:日本語教育)
●専修大学文学部非常勤講師

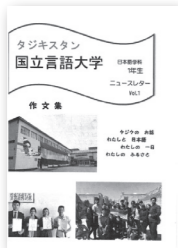
ボランティア成果品
Pick Up
(日本語教育分野)



『パプアニューギニア大学
日本語ビデオコンテスト(2015年、2016年)』
作者:パプアニューギニアの日本語教育隊員
内容:ビデオで日本語の能力を競う「日本語ビデオコンテスト」の出場作品集。課題は「自分たちの文化の紹介」で、「ダンス」や「葬式」、「民話」などが取り上げられた。
形態:1作品5分程度・日本語
構成:画像や動画に日本語のナレーションやインタビューを入れたビデオ



『日本語初級会話テキスト
(インドネシアの初学者向け)』
作者:インドネシアの日本語教育隊員
内容:インドネシアの日本語初学者向け教材。易しい会話表現をイラスト付きで紹介している。
形態:カラー・約190ページ・日本語(ローマ字を併記)とインドネシア語
構成:「挨拶」「数字」「生活」「趣味」「休みの日」ほか、全12パート



『日本語学科行事資料
及びニュースレター』
作者:タジキスタンの日本語教育隊員
内容:日本語学科の学生の学習意欲向上を目的に作成した「学科の行事の記録集」(①)と「ニュースレター(4学年分)」(②)。
形態:①A4判・22ページ
②A4判・1学年分が約20ページ

“スマホ” の活用法

近年、協力隊員の派遣国でもスマホが急速に普及しつつある。他方、周辺機器の多様化やSNSの機能拡充などにより、スマホのできることの範囲も、日々、広がりを見せている。ここでは、協力隊活動でスマホを活用した事例をピックアップ。その活用法のアイデアをふくらませる一助としていただきたい。

CASE 1 | ダウンロードサイト

ふるかわ あい
古川 愛さんの事例
(タンザニア・PCインストラクター・2016年度4次隊)

古川さん基礎情報

PROFILE

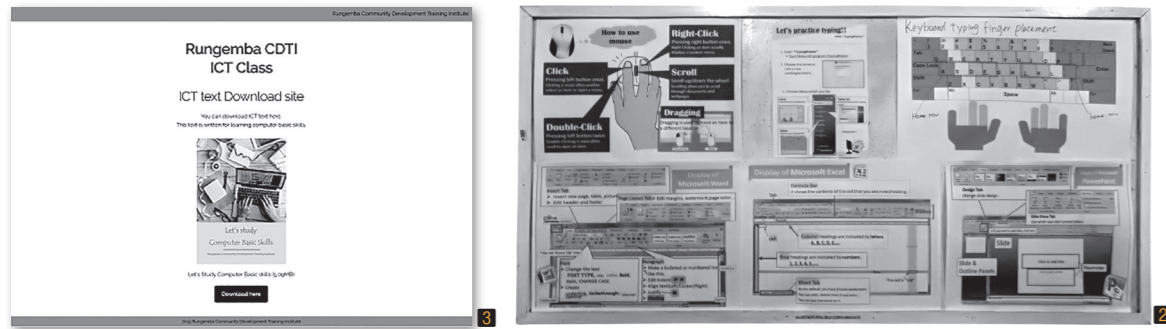
1989年生まれ、愛知県出身。大学の商学部を卒業後、金融機関の一般事務職を経て、2017年3月、協力隊員としてタンザニアに赴任。19年3月に帰国。



活動概要

地域開発に携わる人材の養成機関であるルンゲンバ地域開発訓練校(イリンガ州マフィンガ県ルンゲンバ)に配属され、主に以下の活動に従事。

- ICT授業の実施
- ICT授業の教科書の作成
- パソコンルームのパソコンの修理
- 学生の実習レポートのデータベース作成



1 パソコンルームで古川さんが行ったICT授業の様子。教科書がなかったため、自作のレジュメをプロジェクターで壁に映写して授業を進めた
2 パソコンの「基礎の基礎」を何度でも振り返ることができるようにとの意図で古川さんが作成した、ポスター形式の教材
3 自作の教科書をダウンロードしてもらうために古川さんが作成したウェブサイトのトップページ

古川さんが配属されたルンゲンバ地域開発訓練校は、地域開発に携わる人材を養成する教育機関。日本の中学校にあたる教育課程を修了している女性が通える3年制の学校で、学生数は1学年百数十人という規模だ。第1学年と第2学年にICT授業が設置されており、その支援をするのが古川さんに求められた活動だった。

自作の教科書の ダウンロードが可能な ウェブサイトを創設

カウンターパートとなったのは、ICT授業を担当していた男性教員(以下、CP)。古川さんは、着任してしばらくは彼の授業を見学し、現地の授業のやり方や学生のレベルなどの把握

に務めたが、やがて彼とチームになった。学生の大半は、「スマホは持っているが、パソコンは

持っておらず、使ったこともない」という状況。ICT授業にはカリキュラムが設けられていたが、到達目標とされていたのは、

エクセルで簡単な関数を使った表をつくることのできる程度の初歩的なレベルだった。

古川さんは毎授業で作成してきたレジュメを再構成し、1冊の教科書を編纂した。分量は、A4判で50ページほど。時間の都合上、レジュメに盛り込んだものの、授業で解説しきることができなかつた箇所を、学生たちに

方法だ。インターネット上のダウンロードサイトであれば、校内でなくてもアクセスが可能であり、卒業生や入学予定者など、共有することも叶う。古川さんには、ウェブサイトの設計図にあたるものを作成したり、それをレンタルサーバーに置いてインターネットで公開したりする

に必要知識があった。レンタルサーバーの貸し出しを行うホスティング事業者は、格納できるデータの容量など利用可能な機能の違いにより、料金の異なる複数の利用プランを設けている。古川さんは、自分の帰国後にCPがサイトを管理できるように、彼が理解可能な英語のウェブサイトを設けている。無料のものを選んだ。教科書のPDFは、圧縮すると5メガバイト程度の小さなサイズになっ

授業中、複数の資料のなかから次に見せるものを探し出すのに時間を取られていた。用紙のコストを考え、「プリント教材は配らない」というのが教員間の暗黙の了解となっていた。CPとのチームティーチングでは、古川さんがカリキュラムの内容に沿ったレジュメを作成し、プロジェクターで学生に見せた。

教科書の共有方法として古川さんが着目したのが、学生たちの多くが「スマホ」を持っている点。教科書をPDF化し、学生たちがスマホで閲覧できるようにしようと考えた。

当時、配属校には学生や教員が電子データを容易にやりとりできるようなLANはなかった。そこで古川さんが選択したのは、オリジナルのダウンロードサイトをレンタルサーバーに立ち上げ、インターネット経由で学生たちに教科書のデータをダウンロードしてもらうという

CPが今後、サイトを維持し続けてくれれば、ICT授業に関して学生たちに共有したいデータや情報の共有手段になる一方、インターネットやウェブサイトにに関するCP自身の知識・技術の向上にもつながる。古川さんはそんな期待をしながら、ときどき日本からサイトの様子

CPへの技術伝達も視野に
年度のカリキュラムをひととおりこなし終えた任期の終盤、

ダウンロードしてもらうという

た。月あたりに送受信できるデータの容量に上限が設定されたプランでスマホを利用している学生にとっても、ダウンロードの負担が軽いサイズだ。

た。月あたりに送受信できるデータの容量に上限が設定されたプランでスマホを利用している学生にとっても、ダウンロードの負担が軽いサイズだ。

ITコンサルタントからの OnePointAdvice

ICT技術を指導する隊員が、レンタルサーバーにウェブサイトを立ち上げ、そこから教材などをダウンロードできるようにする作業を教え子や同僚とともに行えば、技術伝達の手段としてとても有意義だと思います。以下、レンタルサーバーの利用に関して留意すべき点を挙げます。

【セキュリティ】レンタルサーバーに立ち上げたサイトへのアクセスを制限したい場合、「IDとパスワードを入力しなければサイトが閲覧できないようにする」という方法をとるのが一般的です。しかし、「共通のID・パスワード」は、「自分のメールアドレス」に比べると他人に漏らすことに抵抗が薄いものです。「自分のメールアドレスとパスワード」の入力をアクセスの条件にできるGoogleドライブなどの違いを教え子や同僚に伝えることが有益だと思います。

【継続性】無料で利用できるレンタルサーバーは、一定期間で更新の手続きが必要なものや、一定期間後から有料になるものもあります。隊員の任期終了後は同僚に更新手続きをしてもらう、あるいはしばらくは隊員自身が日本にいながら更新手続きをフォローする、といったことが必要になります。



adviser (CASE2~4とも)

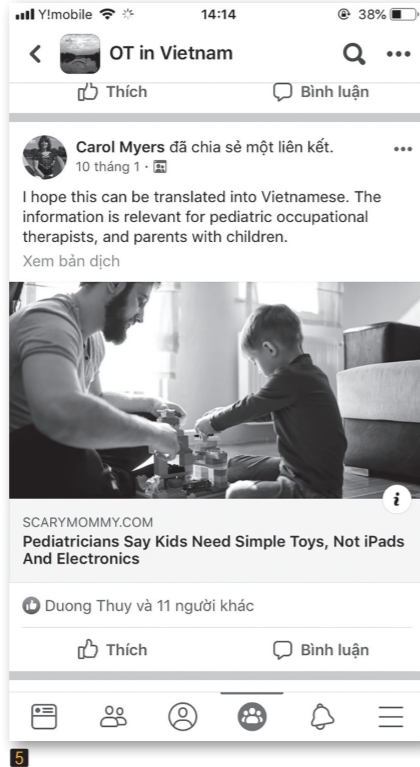
はら ひでかず
原 秀一さん

- ▶ 協力隊経験者
(タンザニア・コンピュータ技術・2001年度3次隊)
- ▶ 株式会社ict4e代表

*1 LAN…1つの施設の中など、限られたエリア内のコンピュータをつなぐネットワーク。
*2 レンタルサーバー…ウェブサイトの設置場所などとして使うために貸し出される、インターネット上のサーバー。



- 1 竹澤さんが作成した自助具（体に障害がある人の日常生活動作を容易にするよう工夫された道具）のスプーンを使い、食事の訓練をする患者
- 2 日常生活動作訓練のひとつとして、患者（左）に掃き掃除の訓練を行う同僚
- 3 認知症患者への作業療法について同僚たちに知ってもらうために実施した、認知症患者のカラオケ大会
- 4 竹澤さんが立ち上げたFacebookグループの画面
- 5 ベトナムで作業療法の支援に携わる外国人を中心メンバーとするFacebookグループの画面
- 6 世界作業療法連盟が定める「世界作業療法デー」に合わせ、竹澤さんがCPと開催した作業療法を広報するイベント



CASE | SNSのグループ機能

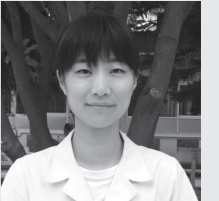
2

たけざわあいこ
竹澤藍子さんの事例
(ベトナム・作業療法士・2016年度4次隊)

竹澤さん基礎情報

PROFILE

1990年生まれ、福井県出身。大学卒業後、作業療法士として脳外科病院に約3年半勤務。2017年3月、協力隊員としてベトナムに赴任。19年3月に帰国。



活動概要

- ハイズオン療養リハビリテーション病院(ハイズオン省ハイズオン市)に配属され、主に以下の活動に従事。
- 患者への作業療法の実施
 - 同僚へ知識・技術の伝達
 - 作業療法室の環境整備
 - 作業療法に関する広報

ITコンサルタントからの OnePointAdvice

限定されたメンバー間の情報共有の手段として、FacebookグループなどSNSに備わる機能を活用する際は、2つのハードルをクリアすることが不可欠です。ひとつは、メンバーとなってもらいたい人たちにアカウント登録をしてもうひとつは、そのSNSを積極的に使ってもらうハードルです。その観点で、同僚たちによるSNSのグループを立ち上げる場合などに、「彼らがFacebookを普段づかいしているから、Facebookグループを選択する」と判断するのは適切だと思います。

ただし、普段づかいしているSNSを情報共有の手段とした場合には、「情報が埋もれてしまう」というデメリットがあります。グループからの情報以外に、プライベートのつながりからの情報などもメンバーに山ほど届くからです。そうした懸念を感じた場合、まだメジャーではない国もありますが、英語版アプリもあるLINEを選択するという手もあります。役割分担ができるうえ、同僚たちは未知のアプリに興味を抱き、積極的に参加してくれるかもしれません。

〈adviser=原 秀一さん (P.15参照)〉

竹澤さんが作成した自助具（体に障害がある人の日常生活動作を容易にするよう工夫された道具）のスプーンを使い、食事の訓練をする患者

日常生活動作訓練のひとつとして、患者（左）に掃き掃除の訓練を行う同僚

認知症患者への作業療法について同僚たちに知ってもらうために実施した、認知症患者のカラオケ大会

竹澤さんが立ち上げたFacebookグループの画面

ベトナムで作業療法の支援に携わる外国人を中心メンバーとするFacebookグループの画面

世界作業療法連盟が定める「世界作業療法デー」に合わせ、竹澤さんがCPと開催した作業療法を広報するイベント

竹澤さんが配属されたのは、病床数約150床という規模のリハビリテーション専門病院。その作業療法部門を支援するところが、求められていた役割だ。同部門には常時、ベトナム人スタッフが一人配置されており、彼らが竹澤さんのカウంటerpार्ट（以下、CP）となった。作業療法士を養成する同国初の講座が医療技術大学で開講されたのは、竹澤さんが着任してまもなくのことだ。そのため、任期の前半にCPとなったのは、作業療法に関してはずかぬ研修を受けただけの理学療法士たち。後半に入ると、新設の講座を受けた理学療法士がCPとなった。いずれのタイプのCPも、作業療法について受けた教育は座学。そのため、彼らに対する竹澤

さんの技術指導の中心は、知識は持っているものの、具体的なやり方がわからない基本的な技術の実践を後押しすることだった。「患者の症状の評価方法」や「日常生活動作訓練」といった技術である。CPに技術を指導する方法のひとつは、ともに患者への治療にあたりながら、必要なアドバイスをしていくというもの。もうひとつの方法は「勉強会」だ。まとまった解説をしたほうが良いと感じる課題が見つかるたびに、それをテーマにした勉強会を開いていった。

竹澤さんが任期の半ばに活動の課題だと感じていたことなの

認知症患者の処方が増加

竹澤さんが任期の半ばに活動の課題だと感じていたことなの

ことができた。竹澤さんの任期が2年目に入ったところである。誰に「グループ」への参加を求めるかについては、CPに判断を一任。メンバーとなってもらったのは、理学療法士や医師、病院の幹部などだ。

実際の活用方法は、事前の予定どおり、勉強会で配布した資料の電子データの共有と、作業療法部門の取り組みを紹介する記事の投稿。後者の作業は、主にCPが担当した。竹澤さんよりはるかにFacebookを使い慣れており、ベトナム語の入力も速かったからである。実際に投稿した記事の中身は、次のような種類の取り組みに関する情報だ。

日本では認知症患者への作業療法として行われている「集団活動」の様子を知ってもらうために実施した、認知症患者たち

かには、次の2つがあった。

1 勉強会で配布した資料を、CPたちがすぐに紛失してしまうため、勉強会で伝えた知識が十分に定着しない。

2 「作業療法が必要」との処方をするのは医師の役目。しかし、作業療法について彼らには「マッサージをすること」といった程度の理解しかなかったため、認知症など体の機能に明らか障害が見られない患者が、処方から漏れてしまっていた。

これらの課題を一石二鳥で解決する方法になると竹澤さんが思いついたのは、作業療法部門の内外の同僚たちをメンバーとする「Facebookグループ」(以下、「グループ」)を立ち上げることだ。「グループ」はFacebookが備えるツ

の「カラオケ大会」

世界作業療法連盟が定める「世界作業療法デー」に合わせて実施した、作業療法を広報するイベント

これらの取り組みについて、「グループ」では事後に報告するだけでなく、事前に告知の記事を投稿し、参加を促すこととした。一方、「グループ」で勉強会の資料を共有したことには、勉強会には参加していない「グループ」のメンバーに作業療法の技術の詳細を知ってもらえるという、計算外の効果もあった。「グループ」によるこうした作業療法の広報には、具体的な効果も見られた。「グループ」を立ち上げる前の1年間は、「作業療法が必要」と認知症患者が処方されたのがわずか2件だったのに対し、後の1年間は7件に伸びたのだ。

Facebookグループで配属部署を超えた情報共有を

* 日常生活動作訓練…食事や更衣など、生活に必要な動作ができるようにする訓練。

*HDMI…映像と音声を一本のケーブルでまとめて送ることができる通信規格。

ITコンサルタントからの OnePointAdvice

現在、無料でも利用可能なWeb会議用のツールにはさまざまなものがあります。ここでは、ツールを選択する際に着目すべき点をご紹介します。

【画質】ZoomなどWeb会議に特化して設計されたサービスは、一般に画質が適度で接続も安定しており、パソコンでの参加や画面共有もできます。国により通信やサービスの事情は異なるので、事前にテストを行い、実際に使う回線に適しているかどうかを確認するのがお勧めです。

【準備の手間】Zoomは主催者のみがアカウントを取得すれば実施できるのに対し、LINEやSkypeなどのビデオ通話機能は参加者全員が取得しなければなりません。その負担を減らすには、参加者がすでにアカウントを持っているサービスを選択する必要があります。

【多拠点通話】現在、LINEなどWeb会議に特化して設計されたわけではないサービスのビデオ通話機能でも、3人以上のWeb会議が開けるようになってきます。ただし、参加できる人数や機能はサービスごとに違いがあります。

〈adviser=原 秀一さん (P.15参照)〉

LINEのビデオ通話 機能で日本の児童との 交流プログラムを実施

首都の小学校に配属され、実技教科の支援に取り組んだ小野口さん。LINEのビデオ通話機能を使い、エチオピアと日本の児童たちが交流するプログラムの開催にも挑戦した。

小野口さんが配属されたのは、首都にある児童数約500人の小学校。美術・音楽・体育の実技3教科の授業を支援することが、求められていた役割だ。同国の小学校は8年制で、体育の授業は全学年にあったが、他の2教科は6年生まで。5、6年生では3教科のそれぞれに独立の授業枠が与えられていたが、1、4年生の間は「エステティック」という1つの授業枠のなかで3教科の授業が行われていた。小野口さんの配属先では、エステティックを担当する教員が各学年に1人ずつ配置され、5、6年生の実技教科はエステティック担当の教員、もしくはほかの教科を担当する教員が兼務することになっていた。

小野口さんのカウンターパートとなったのは、6年生の主任を務めていた女性教員（以下、Aさん）だ。小野口さんとは、派遣前に同じ学年の担任を務めたことのある仲であり、小野口さんの赴任後、道徳の研究授業で小野口さんを題材に取り上げてくれてもいた。Aさんとの間で固めたプランは、以下のよう内容だ。

■Aさんが受け持つ6年生のクラスは、小野口さんが美術の授業を担当する6年生のクラスの児童との交流とする。

■ビデオ通話での交流であるメリットが生かせるよう、「音楽」のパフォーマンスを互いに披露し合う。具体的には、日本側は地域の民謡をリコーダーや鍵盤ハーモニカなどで演奏し、エチオピア側は国内の各民族の伝統ダンスを披露する。

■パフォーマンスを見せ合った後には、互いに自由に質問し合

トとなったのは、体育を専門とするエステティック担当の男性教員（以下、CP）。任期を通して、彼が担当する授業でチームティーチングを行った。任期の1年目に入った授業は、1年生のエステティックと6年生の美術の授業。2年目は、4年生のエステティックと6年生の美術の授業に入った。クラス数は、いずれの学年も2クラスずつだ。

小野口さんが特に力を入れたのは、CPの専門外である美術と音楽の授業。彼にはこの2教科の授業で行うアクティビティの引き出しが少なかったことから、そのアイデアをなるべく多く知ってもらえるよう努めた。美術の授業で実際に行ったのは、スクラッチやスタンプ、ブラシアートなど。音楽の授業では、

■日本側はALT（外国語指導助手）が、エチオピア側はCPがやりとりの窓口となる。彼らど

う時間を設ける。

■時間は、両校の授業コマ分にあたる45分間とする。

■プログラムで使う機材やSNSは、事前にテストを重ねたうえで選んだ。パソコンでSkypeのビデオ通話を試してみたところ、頻繁に中断。結局、スマホでLINEのビデオ通話機能を使うこととなった。

LINEは、小野口さんもAさんも使い慣れたものだった。スマホの画面は大勢の児童にいつせいにいることができないため、エチオピア側はスマホをHDMIのケーブルでテレビ画面につなぎ、映像を映し出すことにした。また、児童がダンスを披露する際にかける音楽は、スマホのマイクでも拾えるようBluetoothスピーカーを使って大きな音で流した。

当日は、開始から30分を過ぎたあたりで通信が途切れてしまったが、いくつかの質問を投げかけたところまでは無事に進めることができた。

プログラムの後、CPはこんな感想を述べた。「やって良かった。異なる国の同じ年代の子どもたちが、映像を含むダイレクトな交流をすることは、とても大きな刺激になったと思う」。実際、参加した配属校の児童たちからは、「日本の子どもたちは、あんなにきれいに並ぶのかと驚いた」「一人が一台、楽器を持っていたのはすごい」といった感想が聞かれたのだった。



1 日本の所属先校から寄贈された鍵盤ハーモニカを使い、その指導をする小野口さん
2 美術の授業でスクラッチ（色を塗り重ね、上から引かいて絵を描く技法）に取り組む児童
3 児童が制作したスクラッチの作品
4 日本の小学校との交流プログラムの様子。日本から送られてくる映像は、右端のテレビ画面に映し出している。手前のスピーカー（筒状のもの）は、ダンスを披露する際にパソコンに保存した音楽を流すのに使った
5 交流プログラムで、通信用のスマホを手に児童たちからの質問を拾うカウンターパートと小野口さん



CASE 3 SNSのビデオ通話

おのぐちひとみ
小野口仁美さんの事例
(エチオピア・小学校教育・2017年度1次隊)

小野口さん基礎情報

【PROFILE】
1984年生まれ、栃木県出身。同県の公立小学校教員を経て、2017年7月、協力隊員としてエチオピアに赴任（現職教員特別参加制度）。19年3月に帰国し、復職。

【活動概要】
首都のアジスアベバ市にあるリデタリマット小学校に配属され、主に以下の活動に従事。
●美術・音楽・体育の授業の支援
●音楽クラブの立ち上げと支援
●配属校と日本の小学校の間の交流プログラムの実施



- 1 動物の真似をする「表現運動」に取り組む幼稚園児たち
- 2 運動するスペースが敷地内になかった幼稚園の園児たちが、敷地の脇の路地で「ケンケンパ」に初挑戦の様子
- 3 高里さんの指導により、中学校の体育授業に導入されたバレーボールに取り組む生徒たち
- 4 スマホを活用した高里さんの指導を受け、砲丸投の全国大会で入賞を果たした女子中学生
- 5 高里さん（右端）がスマホで撮影した映像を見ながら、自分たちのプレーの課題を確認する中学校の陸上競技部の部員たち



教え子のプレーを スマホで撮影し、 技術指導に活用

幼稚園や小・中・高等学校を巡回し、運動部での技術指導などに取り組んだ高里さん。効率的な指導方法として取り入れ、有効だったのは、教え子のプレーをスマホで撮影し、その映像をもとに改善すべき点を考えさせるというものだ。

ITコンサルタントからの OnePointAdvice

スマホに接続し、そこに保存してある動画を映し出す小型の映写機「モバイルプロジェクター」の種類が近年、急速に増えています。薄暗い室内の白っぽい壁をスクリーンにできるものです。値段は数千円レベルから、大きさも「手のひらサイズ」のコンパクトなものからあります。充電式バッテリー内蔵タイプの場合、電源がない場所でも使用可能であり、スポーツや音楽などの指導に携わる隊員に有用でしょう。ここでは、その活用のコツをご紹介します。

【三脚】 意外に難しいのは、適当な高さで適当な角度で映写するためにモバイルプロジェクターの設置を調節することです。そこで重宝するのが、専用の「三脚」。「手のひらサイズ」で構わないので、プロジェクター本体よりも少し重いものが安定性の点でオススメです。**【モバイルバッテリー】** スマホやモバイルプロジェクターの「バッテリー切れ」の心配を打ち消してくれるのが、それらの充電が可能な「モバイルバッテリー」です。数千円程度でさまざまな機種が出されています。

<adviser=原 秀一さん (P.15参照)>

高里さんが配属されたのは、県の教育行政機関の体育・スポーツ課。活動の柱となったのは次の3つだ。

1 **既存の運動部の競技力向上支援** 県内の中・高等学校に以前から存在した陸上競技、バレーボール、サッカー、卓球のクラブを回り、競技力向上に向けた指導を実施。回ったのは約10校。

2 **運動部がない学校でのスポーツの普及** 指導者が足りず、運動部がなかった農村部の中学校

3 **表現運動** 表現運動の定着支援 体育の授業が行われておらず、子どもたちに「運動する」という習慣がなかった幼稚園や小学校を回り、ケンケンパなどの「運動遊び」や、動物になりきって体を動かす「表現運動」などを紹介。回ったのは、幼稚園が2カ所と、小学校が3カ所。

高里さんは、以上の3タイプを回り、体育授業の時間を借りてバレーボールやサッカーを指導。回ったのは約10校。

高里さんは、以上の3タイプを回り、体育授業の時間を借りてバレーボールやサッカーを指導。回ったのは約10校。

高里さんが配属されたのは、県の教育行政機関の体育・スポーツ課に配属され、県内の幼稚園や小・中・高等学校などを巡回して主に以下の活動に従事。

- 運動部の競技力向上支援（陸上競技、バレーボール、サッカー、卓球）
- 運動部がない中学校でのスポーツの普及
- 幼稚園や小学校での運動習慣の定着支援

高里さんが活動で直面した困難には、次の2つがあった。

■多くの幼稚園や学校を回って指導する「超巡回型」の活動だったため、いずれの巡回先でも、時間をかけて指導することが難しかった。そのため、教え子たちの競技力を短時間で効率良く向上させるために工夫を凝らす必要があった。

■巡回先の教え子たちが使う言語はタミル語。高里さんが派遣前訓練で学んだのは英語で、タミル語は短期間の現地語学訓練で学んだだけだった。そのため、体の動きに関する細かなニュアンスなどを伝えることは、当初、難しかった。教え子に伝えたいことを巡回先の現地教員に英語で伝え、タミル語に訳して教え子たちに伝えてもらうといったやり方も試みたが、指導ははかどらない。高里さん自身が手本

CASE 4 動画撮影

たかざと いつき
高里 樹 さんの事例
(スリランカ・体育・2017年度1次隊)



高里さん基礎情報

PROFILE

1980年生まれ、沖縄県出身。(社)日本ブラジル交流協会のプログラムによるブラジル留学研修、沖縄県内の青少年相談センターの巡回指導員などを経て、同県内の中学校の保健体育科教諭に着任。2017年7月、協力隊員としてスリランカに赴任(現職教員特別参加制度)。19年3月に帰国し、復職。

活動概要

トリンコマリ県教育事務所の体育・スポーツ課に配属され、県内の幼稚園や小・中・高等学校などを巡回して主に以下の活動に従事。

- 運動部の競技力向上支援（陸上競技、バレーボール、サッカー、卓球）
- 運動部がない中学校でのスポーツの普及
- 幼稚園や小学校での運動習慣の定着支援

教え子が全国大会で入賞

高里さんが活動で直面した困難には、次の2つがあった。

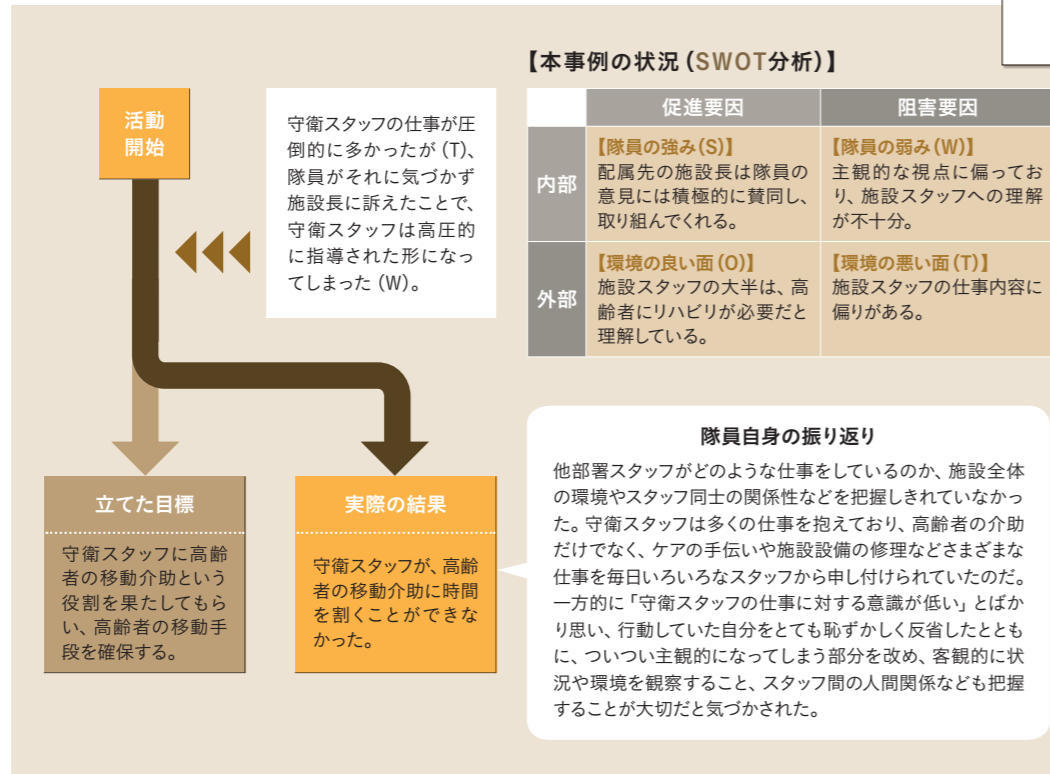
■多くの幼稚園や学校を回って指導する「超巡回型」の活動だったため、いずれの巡回先でも、時間をかけて指導することが難しかった。そのため、教え子たちの競技力を短時間で効率良く向上させるために工夫を凝らす必要があった。

■巡回先の教え子たちが使う言語はタミル語。高里さんが派遣前訓練で学んだのは英語で、タミル語は短期間の現地語学訓練で学んだだけだった。そのため、体の動きに関する細かなニュアンスなどを伝えることは、当初、難しかった。教え子に伝えたいことを巡回先の現地教員に英語で伝え、タミル語に訳して教え子たちに伝えてもらうといったやり方も試みたが、指導ははかどらない。高里さん自身が手本

“失敗”から学ぶ #175



事例整理



スタッフへの理解が不十分なまま 仕事分担を依頼してしまった

文＝野口彩夏さん(ガボン・作業療法士・2016年度4次隊)

私は5代目隊員としてガボンの国立高齢者医療センターという施設に作業療法士として配属された。この施設には看護師、心理士、社会福祉士、運動療法士など医療に関する専門スタッフが勤務し、入所する20人前後の高齢者が多面から必要なケアを受けられるようになっていた。私の主な活動場所は、施設内にある機能訓練室というリハビリをするための部屋だ。カウンタートパート(以下、CP)の運動療法士と決まった時間にそこで高齢者へ運動療法を実施する。そこには運動に必要な器具が並び、治療用ベッドなども揃えられていた。道具がありスタッフの専門性もあり、隊員への理解もある恵まれた環境だった。

一方で、活動当初より悩みがあった。それは「高齢者の移動手段」だ。機能訓練室と高齢者が普段過ごす部屋は離れており、リハビリをするために移動しなければならぬが、大半の高齢者は移動に介助を必要とした。当初は私が移動の介助も行ってはいたのだが、CPに酷く叱られた。「私たちの仕事は、機能訓練室内でリハビリをすること」であり、移動の介助は私たちの仕事ではない」と。高齢者の移動など

介助は守衛スタッフに任せるように言われた。しかし、守衛スタッフがいつも見つけられず結局、可能な限り私が介助をして高齢者を機能訓練室に連れてきていた。約半年後、配属先で協議の場を設けてもらった。施設長は私とCPが話した現状を理解してくれ、守衛スタッフに今一度、「高齢者の介助をしなければならぬ」という意識を持つように」と伝えてくれた。その翌日、翌々と守衛スタッフは積極的に高齢者の送迎をしてくれた。しかし、1週間が過ぎた頃には再び機能訓練室に来る高齢者は減り、守衛スタッフが見つけられなくなった。協議で悩みを共有し、担当する仕事を再確認できたと思っていたので、この状況に失望し、裏切られたような気持ちにさえなっていた。

しかし、一歩下がって施設全体を見たとき、守衛スタッフが多量の仕事を抱えていることを知った。一方的な考えで判断し、施設長に訴えた自分を反省した。高齢者の送迎はその後細々と私が継続していたが、後に赴任した他隊員が守衛スタッフとともに積極的に送迎をしながら働きかけてくれ、着任1年後、少しずつだが守衛スタッフが送迎できる状況となった。

他隊員の分析

粘り強く対話を続ける

「なぜできないのか」「なぜやらないのか」を文化や生活習慣、現地の人々の価値観など、さまざまな背景から分析する必要があったのだと思います。そこに根本的な問題や解決策が隠れている可能性があると感じます。私は解決策を見つけるため、なぜできないのかという原因分析とどうしたらできるかという解決策を文化的側面なども含めCPと一緒に考え、何度も話し合いました。多角的に分析し、解決策を見出すためには時間をかけて粘り強く対話を続け、相手を知ることが重要だと思います。

文＝協力隊経験者

- アジア・作業療法士・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

保健省直轄の中央病院において、同僚や実習生に対して作業療法に関する技術支援や知識の共有、評価表の導入を行った。

「できない」には必ず「理由」がある

失敗の原因は、「会話不足」だと思いました。「できないことには理由がある」という前提に立って、スタッフ全員の仕事を観察、会話することから始めてもよかったのかもしれませんが。各部署間のコミュニケーションを円滑にするのも我々「よそ者」の役目。時間はかかりますが、いろいろな人と関係を構築し、「皆の味方」になると仕事がスムーズにいくこともあるかもしれません。私もそうでしたが、目の前の事象を変えたくて、根本にある課題に気づけないことが多いです。変えたい!と思ったときこそ、発信する前の調査と行動計画は綿密に!

文＝協力隊経験者

- 大洋州・数学教育・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

州立の中高校に配属され、数学教育隊員として、生徒への数学授業の実施や、数学科教員に対する授業の質の改善、全教員に対して勤務姿勢の改善などを行った。



配属先でリハビリを行う野口さん。ガボンには高齢者施設がひとつしかなく、その施設が野口さんの配属先だった。高齢者施設での活動のほか、任地にある孤児院で障害児対象のリハビリ介入や指導なども行った。



PROFILE

1990年、和歌山県出身。2012年、平成リハビリテーション専門学校作業療法学科を卒業後、大阪市内の総合病院にて作業療法士として勤務。退職し、17年3月に協力隊に参加。19年3月、帰国。

活動概要

- ガボンの首都リーブルビル郊外にある、国立高齢者医療センターに作業療法士として配属。以下の活動を行う。
- 入所している高齢者へのリハビリ介入
 - 施設スタッフへリハビリ・介護技術の指導
 - リハビリ室の環境整備、運動器具・自助具の調整や指導

派遣人数は少ないもの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#G215

学芸員

派遣中 ▶ 11人

累計 ▶ 52人

分類 ▶ 人的資源

活動例 ▶ 国立博物館における文化財の保護管理、展示方法の改善 など

類似職種 ▶ 司書 など

※人数は、2019年8月31日現在。



博物館の収蔵庫で土器の整理を行う石川さん。作業はひとりでやっていましたが、帰国直前に活動に興味を持った用務員が作業を手伝ってくれるようになった。「細かい技術などを伝えることはできませんでしたが、先住民への敬意を持って遺物を扱わなければならないことは伝えることができました」(石川さん)

PROFILE

1993年生まれ、茨城県出身。2015年、茨城大学人文学部を卒業し、16年に協力隊へ参加。18年に帰国後、復興庁職員として石巻市教育委員会生涯学習課に赴任し、東日本大震災の復興に伴う埋蔵文化財発掘調査や関連する諸業務に従事。19年、文化庁長官より感謝状を受賞。

活動概要

ドミニカ共和国の国立人類学博物館（現在は無期限休館中）にて、当国における文化財の保存と活用

- 収蔵庫内に放置されている遺物の整理作業
- 小中学生を対象とした土器づくり教室などの体験学習



石川雅啓さん
いしかわまさき

(ドミニカ共和国・2015年度3次隊)

#B131

廃棄物処理

派遣中 ▶ 6人

累計 ▶ 33人

分類 ▶ 公共・公益事業

活動例 ▶ 廃棄物の管理・減量化のための計画作成や助言 など

類似職種 ▶ 環境教育、環境行政 など

※人数は、2019年8月31日現在。



配属先のスタッフと最終処理場のモニタリングをする山本さん。廃棄物処理の職種での派遣はこの数年で始まったものだが、「環境省やJICAを中心として立ち上げられたACCP (African Clean City Platform: アフリカきれいな街プラットフォーム) や、SDGs (持続可能な開発目標) などをととして、世界的に廃棄物の適正管理への注目度が高まっています」と山本さんは話す

PROFILE

1988年生まれ、宮城県出身。2011年、東洋大学国際地域学部国際地域学科を卒業後、廃棄物収集処理会社「武松商事株式会社」に入社。退職し、17年3月、協力隊に参加。19年3月に帰国。現在、東洋大学大学院国際地域学研究所にて、途上国の廃棄物最終処分場の延命化に関する研究を行っている。

活動概要

配属先が保有する廃棄物最終処分場の適正管理を促進するため、以下の活動を行う。

- 最終処分場の運営支援および改善
- リサイクルの導入やそれに伴う分別回収などの新たな取り組みの提案
- 廃棄物管理にかかる各種レポートのフォーマットの改善



山本匡位さん
やまもとまさき

(ボツワナ・2016年度4次隊)

Q メインの活動は？

配属先は、国内最大規模の廃棄物の最終処分場を管理していて、私はその運営改善に関する活動として、主に「最終処分場の残余年数の算定」を行うことになりました。日本ではほとんどの廃棄物は焼却処理され、灰になった状態で最終処分場に埋め立てられるのに対し、開発途上国では焼却処理がされず、さまざまな廃棄物が混ざった状態で埋め立てられることがほとんどです。そのため廃棄物の減容化がされる、最終処分場の状態を定期的にモニタリングすることがとても重要です。配属先の最終処分場は20年間は使える規模で建設されましたが、調査すると20年も使えないことが判明。リサイクルや埋め立て方法の改善により、最終処分場の容量を増やす提案をしました。いろいろな問題があり改善策の実現はできませんでしたが、最終的には残余年数を自分たちで計算するツールを作成し、共有しました。

Q 活動の最大の困難は？

関係各所へ提出するレポートが多い一方で、PCの知識がない人が多かったので、レポート作成やデータの入力などの効率が悪く、フォーマットもバラバラ。データへの信頼度も非常に低く、情報収集の際にも「本当にデータは正しいのか」常に疑心暗鬼でした。

Q メインの活動は？

配属先の目標は館内の収蔵品の目録の作成だということで、目録を作成する上で収蔵庫内に放置されている遺物の問題の解決を優先すべきと考えました。まず、30〜40年前に作成された目録に記載されている遺物の情報と、実際に展示ケースや収蔵庫の棚に並んでいる遺物の情報とを比較してデータ化する作業を実施。カウンターパートは赴任後ほどなくしていなくなつたため、一連の作業は私一人で行いました。プラスチック製の箱が届いてからは、整理作業を開始。私が作成した書式に必要事項を記入し、所定の作業を終えた遺物は梱包して箱に収納しました。

Q 活動の最大の困難は？

一般的に博物館で収蔵庫にある土器や石器など貴重な資料は、丈夫なプラスチックの箱の中で綿などになるまれば保管されており、万一の地震や過失で落下させても壊れないよう保管されていると思います。しかし、この博物館では開館以降、台の上にとだ並べられているなど、決して適正な保管はなされていませんでした。そんな中、私は1年以上にわたり館長に適正な保管の重要性を伝え、プラスチックの箱を購入するよう訴えかけました。館長は博物館の運営は文化省に委ねられており、許可が下りないと回答するのみで事態が一向に好転せずにおりました。

Q どう対応しましたか？

同僚たちを巻き込んで一緒に考え、やってみるのが大切だと感じました。最初に、担当している同僚にレポートについて説明してもらい、問題点や改善点の共有を行いました。これによって、彼らがきちんとレポート（「仕事」と向き合い、注意深く観察するようになり、何のためのレポートなのかを再確認することができました。次に取りまともを行っている配属先用のフォーマットの改善に着手。新フォーマット配布の際には、皆が理解できるようにマニュアルも添付し、説明会も開催しました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

「廃棄物管理」というと専門的な知識や経験が必要なのだと思うけれど、敬遠されがちだと思いますが、実際にはそこまで気負わなくてもいいのかなと思います。専門知識があるに越したことはないですが、実務経験がなくても貢献できることはたくさんあります。ボランティアである私たちが、限られた時間の中でできることはわずかなかもしれませんが、2年間の活動だけでは結果を出すことはできないかもしれません。それでも現地に入り込んで密接に人とかわかることのできる私たちの強みを生かしながら、現地のためにも自分自身のためにもさまざまなことに挑戦してほしいと考えています。

Q どう乗り越えましたか？

この押し問答を続けるよりも、次代を担う小中学生に対して文化財の大切さを伝える方がやがて世論を動かす可能性があるので、小中学校数校で土器づくり教室などの体験学習を実施しました。小中学生には実物の土器を見せた上で、粘土遊びにならないよう、あくまで本物を目指してつくるよう指導しました。残りの任期が3カ月となったころ、館内に突然プラスチックの箱が届いたため、無事整理作業に復帰することができました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

文化財保護は、直接的に日々の命をつなぐことに結びつかないため、後回しにされることがあるかもしれませんが、私はそうした状況に打ちひしがれるたび、文化財を大切にすること、それらを受け継ぐことによって、その土地に生きる者としての誇りが醸成され、魅力あふれる社会が築き上げられるという、最終的な到達点を幾度も把握し直しました。そこへ到達する素地を整える上で私の活動は役立っただと、ある種自分自身を納得させていたように思います。館長にたびたび真情を吐露しましたが、こうした葛藤や現地人と触れ合う経験は、帰国後必ず生かされます。思う存分に世界を、自分を変え、2年間を過ごしてください。

* 遺物…遺跡から出土した、土器や石器といった人工物のほか、貝や骨、植物の種、炭化物など。

* 残余年数…現在の最終処分場（埋立処分場）が満杯になるまでの残り期間の推定値。



before ▶ after 人生を変えた2年間

before
航空貨物輸送代理店 社員

after
農家民宿 経営者



after

徳島県神山町にある、農家民宿「moja house」。mojaはベンガル語で「おいしい・楽しい」の意味。神山町の郷土料理やバンラデシュのカレーづくり体験、精進料理の会なども開催している。料理を教えてくれたのは、バンラデシュや神山町の「お母さん」たち。自ら「食いしん坊」という川野さんは、町の人からご飯に誘われたときは喜んで一緒にするという。「町の人と、野菜の植えどきや、かぼちゃのおいしい炊き方、ムカデの退治の方法など、たわいもない話をする時間が好き。バンラデシュで生活していたときもそういう時間が好きでした」と川野さんは話す

2019	2016	2015	2013	2010	1988
<p>神山くらしの宿moja house</p> <p>住所：徳島県名西郡神山町 神領字本小野363</p> <p>開業日：2019年4月19日</p> <p>URL: https://www.moja-house.com/</p> <p>アクセス：JR徳島駅から車で約1時間</p>	<p>4月、徳島県神山町の地域おこし協力隊として、すだちの新しい食べ方を発信する「東京すだち遍路」という活動や、神山の町や人の魅力を紹介する「里山みらい新聞」の編集・執筆などを行う②</p>	<p>10月、帰国。</p>	<p>10月、青年海外協力隊に参加①</p>	<p>3月、大学卒業後、航空貨物輸送代理店に入社。</p>	<p>千葉県出身。</p>

選択の理由

20代のうちに海外で働きたいという希望があり、中国赴任ができると思って入社したが、海外勤務は狭き門で、厳しい現実を知り、海外での活動ができる協力隊への参加を決める。

選択の理由

地域で活躍する仕事を探し、移住フェアなどにも参加したが、神山町の魅力ある地域おこしの取り組みを知り、移住を決意。

協力隊に参加

↓

神谷町に移住

東日本大震災がきっかけで「自分の暮らしを自分でつくる」ことを考え始めた川野さん。青年海外協力隊に参加し、活動先の農村で、人々が助け合い幸せをわけ合いながら生活する姿を見て、自身も地域で暮らしたいと感じるようになった。帰国後、地域おこし協力隊として徳島県神山町に移住し、任期満了後、同町で農家民宿を運営している。

う印象もあったが、現地で清掃活動をしていると、小学生があいさつを、地元の人が労いの言葉をかけてくれた。当時は振り返り、「私の方が元気をもらいました。ボランティアとは双方向なもので、何かをわかち合うものなのだと感じました」と川野さんは話す。

ボランティアは押し付け？

高校生の頃、反日運動のニュースを見て、中国映画が好きだった川野さんは悲しい気持ちになった。同時期に韓流ブームがあり、文化交流で国同士は仲良くなれるのではないかと思いつき、大学で国際化学を学び、上海に留学。大学卒業後は、中国語を生かして働ける東京の航空貨物輸送代理店に就職した。入社1年目の業務中、東日本大震災が発生。停電し、店から食料が消えたとき、川野さんが思ったのは「自分で自分の暮らしをつくらなければならない」ということ。その後、東北の被災地の状況を人ごとと思えず、ボランティア活動に参加する。それまでボランティアは「偽善」や「一方通行な押し付け」とい

動務先には海外勤務を希望して就職したが、しばらくして会社の方針から難しいと気づいた。そんなとき、電車で協力隊募集の中吊り広告を見て、参加を決意。双方向の活動ができるコミュニティ開発の職種で応募して合格。バンラデシュへの派遣が決まった。

川野さんは、バンラデシュで土地を持たない農家や少数民族などの貧困層を対象に、生活向上のための支援を行うNGOに配属され、コンポストや野菜づくりなどによる生計向上活動には取り組んだ。同国は、南アジア最貧国とも言われ、川野さんも現地に行くまで悲壮感漂うイメージを持っていた。ところが活動で村を訪ねると、人々は明るく、人懐っこく、また人をもてなす。子の誕生や、自分の誕生日には、喜びを持つ人が他の人にお菓子を配る。家族と近所の人との壁も低く、互いに協力し、助け合っていた。配属先のNGOでは、足に障害のある人が働いてい

幸せのわかち合い

川野 歩美さん

バンラデシュ・コミュニティ開発・2013年度2次隊



袋で栽培できる野菜の育て方のデモンストレーションを行う川野さん

魅力を知る一方で、気になったのは安価で気軽に泊まれる宿が少ないことや人口減少による農業や祭りの担い手が不足していること。そこで神山町の魅力を体験する場を提供し、人手不足の解消につながればと農家民宿の開業を決めた。

2018年に現在の宿兼住居となる古民家を借り、1年かけて改装。19年に開業した。農家民宿を始めるには農家である必要があるが、川野さんは神山町に来てから田んぼを借り、米をつくる農家でもある。宿の周囲には畑もあり、そこで野菜を育て、すだちなど柑橘類の木の手入れをする。朝は畑と田んぼの様子を見て草を刈り、宿の予約が入っている日は、洗濯や掃除をして買い出しに行く。「田舎暮らしは草との戦い」と川野さんは言うが、その表情は晴れ晴れとしている。

都会の生活との大きな違いを感じるのには、草刈りや祭りの開催など自分たちの地域のことは住民が当たり前のように行うこと。地域に溶け込んだ暮らしを望む川野さんにとって、地域の活動に参加し、地域の人と話をする時間はかけがえのないものもある。

開業して6カ月、現在の予約は知り合いが多いが、町の人の口コミや雑誌への掲載により予約が入ることも増えてきた。当面の目標は食料自給率を上げることだという。

「米と野菜の収穫量はまだまだ少なく、自給自足には程遠いので、収穫量も野菜の種類も増やしていきたいですね。また、田植え体験や料理教室の開催をとおして、神山の魅力を広めたい。宿に来たことで、お客さんが新しい出会いを体験したり、この町を好きになっ

自分の暮らしを自分でつくる

帰国後は、バンラデシュのように地域の人とコミュニケーションをとりながら働くことを希望していた。そんなとき、神山町で特産品のすだちや梅を使った地域おこし協力隊の募集を知り、同町への移住を決意する。神山町の魅力を川野さんは「自然溢れる山間部にあるので、水も野菜もお米もおいしい。何より人が温かい。『お遍路』の文化があるからか、訪れる人を歓待してくれる」と話す。地域おこし協力隊の活動で、神山町の

つてもらえたりするのが私の幸せです」



理想 現実

帰国後のとを語り合う

OB・OG 匿名 座談会

第10回 日本語教育分野 篇

帰国後の進路開拓

A 私は民間団体のプログラムで2年間、ブラジルの日本語学校で日本語教師として働いてから、同じブラジルの別の日本語学校に日系社会青年ボランティア（以下、「日系青年」として派遣されました。帰国して最初に就いた仕事は、ハローワークの外国人窓口の職業相談員です。私の出身県には日系ブラジル人の集住地があり、勤めたのはそのハローワークです。主な相談者は日系ブラジル人の方たちでした。その後、夫の転勤で他県に移ることになり、その県にある大学で留学生の生活をサポートする仕事に転職して今に至ります。

B 私は地域情報誌の広告営業に携わっていた時期に日本語教師養成講座を受講した後、「日系青年」としてブラジルに赴任しました。私の出身県も多くの日系ブラジル人が工場労働者として働いており、市役所にはポルトガル語の翻訳や通訳をする嘱託員のポストが置かれています。私は帰国後、まずはその仕事に就き、その後、日系ブラジル人を工場に派遣している県内の人材派遣会社で彼らに日本語を教える仕事に転職しました。

C 私は日本国内の日本語学校で3年間、常勤の日本語教師を務めた後に協力隊に参加しています。帰国後は、国際協力団体に1年あまり働いた後、大学院に入学して日本語教育の研究を始めました。私は日本語教師として働き続けたいと思っており、そのためには日本語教育の修士号を持っているほうがいいと考えたからです。現在は大学院での勉強のかたわら、日本語教師を派遣する会社に登録し、外資系企業の外国人社員を相手に日本語の個人レッスンをしたり、日本語教師養成講座の非常勤講師

を務めたりもしています。

A 私は帰国後、ブラジルにかかわる仕事を見つけようと思って最初に訪ねたのが、実際に勤務することになるハローワークの外国人窓口でした。日系ブラジル人の集住地にあるハローワークの外国人窓口なら、何かしら情報が得られると考えたからです。「日本人ですよね？」と怪訝な顔をされたのですが、結局、その窓口の職業相談員の仕事を紹介していただくことができました。その際、「日本語教師の仕事ならいくらでもあるのに」とアドバイスされたのですが、日本で暮らす日系ブラジル人の方々は日本語学校には通いませんので、職業相談員の仕事を選びました。「日系ブラジル人に日本語を教える」というBさんのような仕事があることは知らなかったのですが、どのように見つけたのでしょうか。

B 市役所で働いている時期、日系ブラジル人を対象とする無料の日本語教室の講師をボランティアで務めていました。その教室を通じて、今の勤務先である人材派遣会社の人から私のことを知り、声をかけてもらえました。日本語教師を雇うのは会社として初めての試みであり、「日本語教室を一から立ち上げてほしい」という依頼でした。在日外国人や彼らとかわりのある日本人は、SNSなどを通じて密なネットワークを築いているので、在日外国人にかかわる仕事を見つけたという場合には、そうしたネットワークに入り込むのが一番ではないかと思っています。

「海外経験」で得たこと

A 私たちはいずれも在日外国人にかかわる仕事をしているわけですが、そうした

あったからだと思います。

B 私の「日系青年」時代の活動もやはり「マルチ」でした。派遣された学校は、日本語の授業をほぼ一から立て直さなければならぬような状態であり、教室の大掃除など日本語教育以前のことから活動だったからです。しかし、そうした経験があるからこそ、現在勤めている会社で日本語教室を一から立ち上げる仕事にも臆せず挑戦できたのだと思います。

今後の見通し

B 私の今の教え子たちは、日本語を習得しても給料が上がるわけではなく、「日本人ともっとコミュニケーションをとりたい」という思いで日本語教室に通ってくる方々です。私はそうした思いに応えられるだけの経験を「日系青年」でしたので、今後も今の仕事やボランティア活動を続けたいと思っています。

A 私は日本国内でも住む場所によって選べる仕事の範囲が違ってくるというのを実感しています。ですので、仕事についてはそのときどきの状況で自分の能力や経験を生かすことができるものを選びつつ、やはりアテンナを張り続け、なんらかの形でブラジルとかわりを持ち続けたいと思っています。

C 私は修士課程を終えるまでにと1年くらいあり、その後の進路はまだ決めていません。しかし、日本語教師として教壇に立つ「現場」の仕事が好きなので、それをずっと続けていければと思っています。一方で、国内外で日本語教師を務めた経験は、これから日本語教師になるうとする人の参考になるということも感じていますので、日本語教師養成講座の仕事もチャンスがある限り続けていきたいと考えています。

「マルチ」な経験で成長

C Bさんは「日系青年」の時代も現在もブラジル人に日本語を教えているわけですが、授業のやり方に違いなどはありますか。

B いずれも教科書は「みんなの日本語」ですので、基本的に違いはありません。ただ、私の出身県は方言があるので、今の仕事でもそれも教えているといった違いはあります。

C 私もやはり、日本で日本語教師を務めるときと、協力隊員として日本語教師を務めるときとは、授業自体に大きな違いはないと感じています。根本的な違いだと思っるのは、海外で日本語を教える場合、日本語の授業を行うことだけでなく、日本文化紹介のイベントを実施するなど「マルチ」な役割を求められる点です。協力隊でそうした経験ができたことは、日本語教師としての幅を広げてくれたと感じています。「マルチ」な役割を果たそうとすれば、ほかの教員や生徒たちの力を借りる必要があります。彼らと関係を築く力が養われる。そうした力は、どこで日本語教師をする場合でも重要であり、私は現在、日本語教師養成講座の授業でもその点を伝えるよう努めています。

A 「日系青年」の日系日本語学校教師は、「職種名は「日本人」と言えるくらい、「マルチ」な役割が求められます。私も和太鼓チームのメンバーになったり、盆踊り大会など日系社会の行事に参加したりと、できることはなんでもやるようにしたのですが、そうするとやはり手が回らなくなる。そうしたなか、ある日系人の方に「大変なときは、人に協力を求めなさい」と諭されたことがありました。それにより、躊躇せず人の手を借りるということを覚えしました。日本人なのにハローワークの外国人窓口に押しかけたりできたのも、そんな経験が

仕事をするうえで、やはり自分自身が海外で「外国人」として暮らした経験は強みになると感じています。今、私が担当しているのは、留學生寮で寮生の生活のサポートをする業務です。「コミ出し」の仕方について住民から苦情が入るなど、留學生の生活ではさまざまなトラブルが生じるのですが、どんなトラブルが舞い込んでも、私は動じないでいられる。それは、「外国人につきものトラブル」を私自身がブラジルでたくさん経験してきたからだと思っています。

C 私は、協力隊時代に「社会のマイノリティー」となった経験が、在日外国人に日本語を教えるうえでの強みになっていると感じています。彼らが「社会のマイノリティー」として何を感じているかを察することができ、それによって生まれる彼らとの信頼関係が、日本語を教えるうえでもプラスになるからです。

B 私は、海外で暮らしたことにより、在日外国人の母国での生活に思いが及ぶようになったことがとても貴重だと感じています。今、日本語を教えている日系ブラジル人の方々が母国で就いていた職業は、歯科医やカメラマン、パティシエなどさまざまです。私は、ブラジルで暮らした経験から、彼らが母国で自尊心を持ってそれぞれの仕事に取り組んでいた様子が想像できるため、日本でもそれぞれの得意技を生かして活躍できるような場をつくってあげたいという気持ちが強いです。そうした思いから、日本語教師としての仕事のかたわら、地域の日本人を対象とするブラジル料理やポルトガル語などの教室を開き、そこに講師として日系ブラジル人の方を招くボランティア活動もしています。彼らは仕事ばかりの日々で、地域の日本人と接する機会が少ないので、両者の間に「名前呼び合えるような関係」を築く手伝いをしたいという意図もあります。



生活に役立つ技

あるもので日本の味

ナビゲーター = 土田高義さん (SV/セネガル・料理・2018年度2次隊)

名古屋風手羽先唐揚げ

派遣国で生活していると、日本の味が懐かしくなったり、現地の人に日本ならではの料理を求められたりすることがあると思います。そんなとき、安くて簡単に誰でもおいしくつくれる「名古屋風手羽先唐揚げ」のつくり方を紹介します。

【材料】



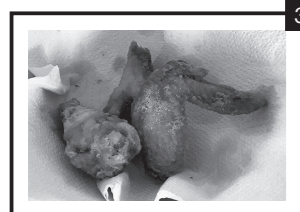
【手羽先】(すべて適量)

●手羽先あるいは手羽元 (40g以下の小さめのものがカラッと揚がる)

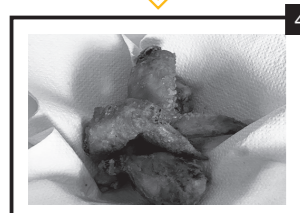
- 塩
- 粉胡椒
- 小麦粉
- ビニール袋
- 植物油

【タレ】(数字は比率)

- しょう油…2
- みりん…1 (ハチミツ0.5と酢0.5で代用可)
- 砂糖…0.5
- ニンニク(すりおろし)…適量
- 酒(手近なアルコールで代用可)…1



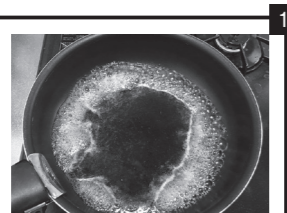
③160~170℃の低温の油で手羽先の両面を2~3分じっくり揚げ、取り出して5分ほど時間を置く。このとき手羽先はまだ白色。



④180~190℃の高温の油で両面を30秒~1分ほどカラッと2度揚げする。細かい泡がバチバチ飛ぶのでやけどに注意!揚げ終わった手羽先はこんがりキツネ色。



⑤油をよく切って取り出し、①のタレを塗り、お皿に盛りつけて出来上がり。盛りつけの際、粉胡椒をさらに振りかけ、辛みをつけるのが名古屋風ですが、各自・各国人のお好みでお試ください。



①【タレをつくる】タレの材料を混ぜ合わせ、まるみ(あるいはとろみ)が出るまで5~10分ほど火にかけて出来上がり。



②手羽先に軽く塩・胡椒して15分ほど置いた後、全体に小麦粉をまぶす。このときビニール袋の中でまぶすと簡単に早くできる。

知ったく情報

筋トレで健康に! ③

ナビゲーター = 山村昂平さん (ジンバブエ・陸上競技・2016年度3次隊) アスレチックトレーナー

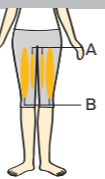
内転筋ストレッチとワイドスクワット

疲労の原因物質は活性酸素です。活性酸素を除去するには睡眠が必要です。しかし運動不足になってしまうと睡眠誘発物質が生成されずいい睡眠が取れなくなります。適度に生活の負荷を高めて質の高い睡眠を得るために、筋トレは非常に有効な手段だと言えます。

内転筋ストレッチ→ワイドスクワット (10回×3セット)

この筋肉にきく!

- A.内転筋(ないてんきん) …太ももの内側の筋肉で、下半身のバランスをとる役割を持つ。
- B.大腿四頭筋(だいたいしとうきん) …膝関節や股関節を動かすための筋肉。鍛えると膝痛・腰痛に効果的。 ※痛みや違和感がでる場合には中止してください



0 まずは、ストレッチ。

30秒交互に1セット。



- ポイント
- ①開脚は開ける範囲で良い。
 - ②伸ばした足のつま先は上げる。
 - ③お尻は地面についている。
 - ④可能であれば手を前について骨盤を前傾させる。



1 足を広げてまっすぐ立つ。

3秒で下ろし、3秒で上げる。膝が伸び切ったときお尻を絞り、2秒静止。15回3セット。

- ポイント
- ①つま先を外側に向ける。
 - ②背筋を伸ばす。



- ポイント
- ①膝が内側に入らないようにゆっくりと腰を落とす(つま先と膝の方向が同じ、もしくは膝が少し外側)。
 - ②足の裏全体で体を支える。
 - ③腰を下ろしたときに、お尻と太ももの筋肉が伸びているのを感じる。

生活に役立つ技

自分で髪の毛を切ってみよう②

ナビゲーター = 斉藤達也さん (インドネシア・美容師・2014年度3次隊) プライベートサロン「LORONG」[305]「BUKA BUKU」オーナー美容師

メンズやショートスタイル向けのカット 髪の毛の量の減らし方

髪の毛の量を減らすときは「すきバサミ」を使います。日本から持っていき必要がありますが、隊員連絡所に置いてあることも。本格的なカットはプロの美容師にってもらう方がよいでしょう。現地のできるヘアケアとして、できれば1日1回、髪の毛を洗うと頭皮へのダメージが少なくなります。

【用意する物】

- すきバサミ
- 鏡
- クシ(あれば、コム)
- 髪の毛が服や床に残るのが気になるときは、ゴミ袋(ケープがわり)と新聞紙(床にしく)



①両サイドを切る。上下2段に分けて切るイメージで。

②つむじに向かってハサミを入れる。片側を4~6回ほど切る。

③すきバサミによって切れる髪の毛の量が違うので、切る回数は様子を見て調整。

④ハサミの刃の全体を使って切る。反対側も同様に切る。

⑤後ろ側を切る。3段に分けて左右から切るイメージ。

⑥つむじに向かってハサミを入れる。全体で12~18回切る。

⑦ハサミの向きと切る場所が大体あっていれば問題ない。

⑧前側を切る。2段に分けて左右から切るイメージ。

⑨つむじに向かってハサミを入れる。全体で6~10回切る。

⑩髪を切ったらコムでとかして、髪を落とし、切った量を確認。

⑪つむじの周りを切る。髪をねじって持ち上げる。

⑫持ち上げた根元にハサミを入れる。ねじる場所を変えて2~3回切る。

⑬もみあげを切る。ハサミの先を使って、量を減らす。

⑭耳の周りを切る。ハサミの先を使って縦に切っていく。

⑮耳の後ろ側は、耳を折り曲げて、ハサミを縦に入れて髪を切る。反対側も切ったら完成。

睡眠：心と体のバランスを保つために

開発途上国で元気に活動するためには、日々の健康を維持することが何よりも大切です。一見、健康に対する自己管理と聞くと、風邪予防や食中毒予防といった「病予防」を想像しがちですが、実は身体だけでなく心の健康もとても大切です。そして、この心の健康と「良質な睡眠」とは切っても切れない関係にあります。朝、気持ちよく目覚めていますか？ 夜中や朝方早く目が覚めることや、布団に入ってもなかなか眠れない、熟睡感がない、などということはありませんか？

1日活動した後は、体も心（脳）も思った以上に疲れています。忙しい日々が続き、慢性的な睡眠不足が続くと、疲労の回復が難しくなります。睡眠はその日の心身の疲労を回復させ、免疫機能を強化する役割があります。この睡眠が障害されると、眠気やだる

さ、集中力低下など日中の活動に支障が出はじめ、さらに不眠状態が長期間続くと、生活習慣病やうつ病などの心の病につながりやすくなります。ちなみに、ときどき「寝溜め」をする方をお見かけしますが、実は睡眠は溜めてはおけないので、毎日しっかりと眠ることが大切です。疲れて集中力が途切れたまま活動を続けていても、効率は落ちる一方です。それならば一旦切り上げてきちんと眠り、翌朝すっきりした頭で活動に取り掛かるほうが効率よく、新たなアイデアもエネルギーも湧いてくるかもしれません。この睡眠の効果はポジティブな気持ちを保つための基本ともいえるでしょう。したがって健康を意識するのであれば「睡眠は全てに優先する」ことでもあるのです。派遣国では意識的によく眠るよう、心がけて過ごしてみてくださいね。

「尾木ママ」も参加！ 現職教員向け帰国後研修の実施



尾木氏の体験談に聞き入る尾木氏

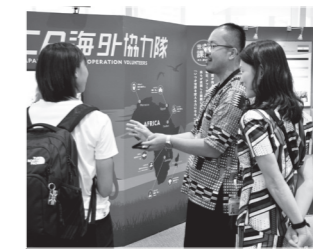
8月17、18日に東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルで、現職参加制度を利用して派遣された教員32人を対象に帰国後研修を実施しました。この研修は、協力隊での経験を振り返り、教育現場においてその経験をどのように活用できるかを検討し、実践へつなげることを目的としており、今回が初めての試みになります。協力隊に参加した教員によって組織されるOBOG会「全国OV教員・教育研究会」からも協力隊経験者が講師として参加。隊員当時の活動での感動や悩み、また日本の教育現場に復帰した今感じることなどを参加者同士が共有しました。

昨年モンゴルを訪問し、現職教員の隊員に関心を持った教育評論家の「尾木ママ」こと尾木直樹氏もプログラムの一部に参加しました。「皆さんの開発途上国での経験を聞くことができ良かった。今後更に協力隊について理解を深め、発信していきたい」とのコメントをいただきました。



参加者へ激励メッセージを送る尾木氏

第7回アフリカ開発会議（TICAD7） にて、協力隊のブースを出展



TICAD7の会場で来場者にアフリカでの協力隊の活動を説明するJICAスタッフ

8月28～30日、神奈川県横浜市のパシフィコ横浜にてTICAD7が開催されました。青年海外協力隊事務局は、8月27～30日に開催されたサイドイベントにてブースを出展し、アフリカ各国に派遣されている隊員の活動やスポーツと開発をテーマにしたパネルなどを展示し、協力隊の活動や事業について紹介しました。

8月27日には前夜祭イベントとして、横浜市の「象の鼻パーク」でJICA主催の「BON for AFRICA（アフリカ盆踊り）」も開催。同会場でも協力隊事務局は協力隊の募集・広報のブースを出展しました。イベントでは、アフリカの音楽やダンスのパフォーマンスなどが披露されたのち、盆踊りがスタート。DJ KOO氏がアレンジし、日本舞踊家の藤右近氏が振り付けた、美空ひばりさんの名曲「川の流れのように」や盆踊りの定番曲「炭坑節」、TRFの楽曲などに合わせ踊る1時間。アフリカから来日した研修生や、協力隊経験者、一般の来場者など約2200人が、稽を囲みました。



BON for AFRICAは藤右近氏を中心に開始され、DJ KOO氏などとともに、クールなアフリカを魅せるために開始されたプロジェクト

いつ? どこ?

隊員関連イベント情報

JICAやその関連団体が主催・共催・後援などをするJICA海外協力隊関連のイベントをご紹介します。

10月19日

多文化共生をすすめるには —海外経験の活かし方—

愛媛

日本における多文化共生のポイントを、田村美津子さん（マラウイ・幼児教育・2009年度3次隊）と松下博幸さん（パナマ・環境教育・2014年度3次隊）の2人の講師と一緒に探しましょう。

- いつ? 10月19日(日) 13:00～16:30
- どこ? 愛媛大学愛大ミュージアムM24 (愛媛県松山市)
- 詳細 「JICA四国」ウェブサイト内「イベント情報」をご覧ください。

開催中～
10月25日

2019年度・秋 JICA海外協力隊活動写真展

北海道

道東出身、もしくは道東に縁のある協力隊員と隊員OB・OGから提供いただいた活動写真を展示中。JICAボランティア事業の説明資料や協力隊員の現地での体験談なども展示しています。

- いつ? 9月1日(日)～10月25日(金) 07:00～22:00
- どこ? JICA北海道(帯広) 1階ロビー(北海道帯広市)
- その他 ご来場、お待ちしております!

10月19日～27日

第26回 みなこいワールドフェスタ

長野

JICA駒ヶ根青年海外協力隊訓練所開設40周年を記念し、さまざまなイベントを開催します。メインイベントである10月27日の「こまがね国際広場」には駒ヶ根訓練所や協力隊OB・OGも参加します。

- いつ? 10月19日(土)～10月27日(日) ※各イベントの日程・場所は詳細参照
- 詳細 https://www.city.komagane.nagano.jp/gyosei/shiseijoho/jutenjigyo_project/kokusaikoryu/minakoiWF/4324.html

10月12、13日

ワールド・コラボ・ フェスタ2019

愛知

中部地域の市民、NGO・NPO、企業、行政が協力し、持続可能な社会の実現のため「学び、考え、行動する場」をつくりあげるこのイベントにJICA海外協力隊のブースを出展します。

- いつ? 10月12日(土)、13日(日) 10:00～18:00
- どこ? オアシス21「銀河の広場」(愛知県名古屋)
- 詳細 <http://www.world-collabo.jp/>

帰国後の進路を考える 帰国後研修、帰国報告・交流会の開催

8月24～27日に東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルで帰国後研修を開催し、107人の帰国したJICA海外協力隊が参加しました。この研修は、隊員経験を帰国後どのように生かすかをじっくり考える内容になっています。

帰国後研修の後に開催される帰国報告・交流会には、隊員の活用に関心を持っている自治体や企業などの関係者が参加し、自治体向けの会に18団体、企業向けの会に58団体が参加しました。本研修・交流会について、各隊員には帰国直前に在外事務所を通じて案内していますが、進路開拓中の帰国隊員も参加可能です。詳細については、下記メールアドレスにお問い合わせください。

▶JICA青年海外協力隊事務局 人材育成課
jvtpc-sinrosien5@jica.go.jp

今回の帰国後研修、帰国報告会・交流会の予定

帰国後研修	日程	場所
職場復帰コース	11月16、17日	JICA市ヶ谷ビル
進路開拓コース	11月16～19日	JICA市ヶ谷ビル
帰国報告会・交流会	日程	場所
自治体・団体向け	11月19日	JICA市ヶ谷ビル
企業向け	11月20日	JICA市ヶ谷ビル

JICAボランティア事業と大学の連携

JICAボランティア事業では、大学の持つ専門性を活用し開発途上国への支援を充実させるとともに、大学の人材育成を目的として、大学の組織的支援を得て、大学生・大学院生などを派遣しています。この度、JICAでは新たに4大学と大学連携にかかる覚書を結びました。

大学	派遣国	職種
酪農学園大学	ウガンダ	獣医・衛生、家畜飼育、畜産・乳製品加工
筑波大学	マレーシア	日本語教育
拓殖大学		
立命館大学		

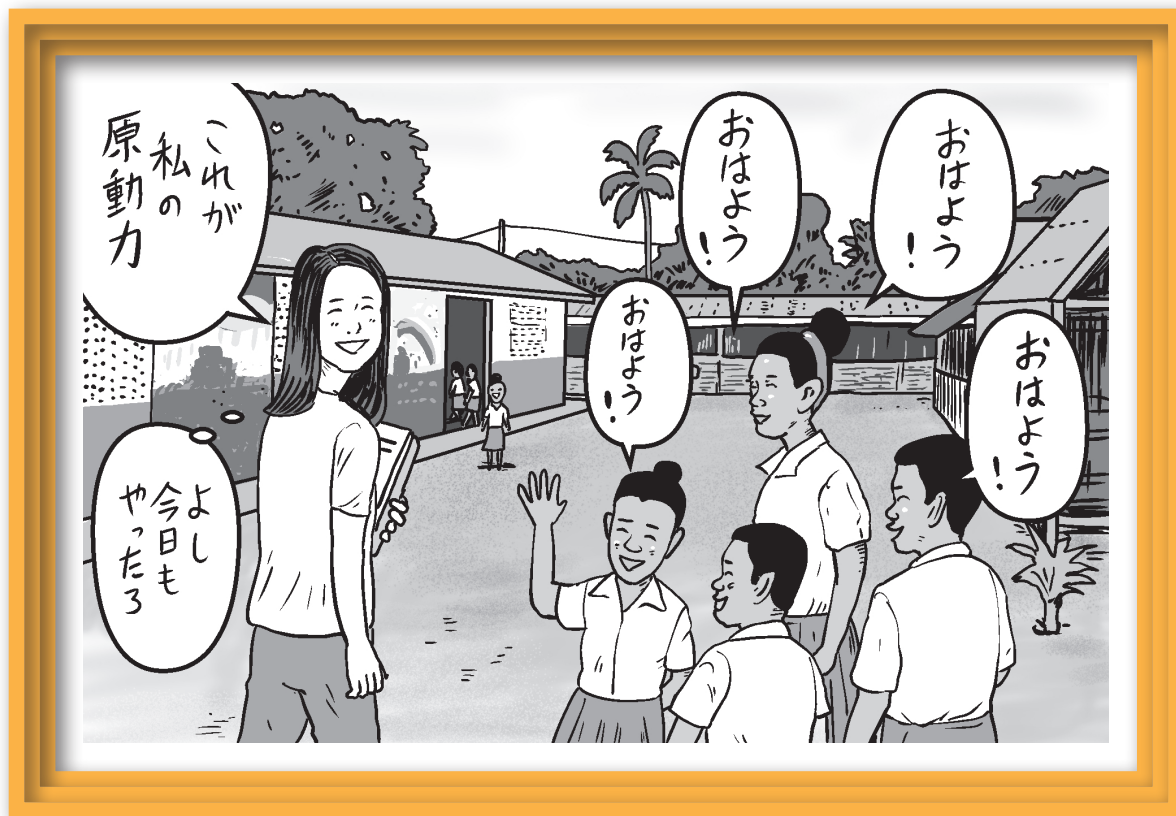
2019年度2次隊の派遣前訓練が開始

2019年度2次隊の派遣前訓練が始まりました。入所者数は以下のとおりです(9月12日現在)。9月12日から11月12日まで訓練を受け、その後各国に派遣されます。

訓練所	青年海外協力隊・海外協力隊	日系社会青年海外協力隊・日系社会海外協力隊	シニア海外協力隊	日系社会シニア海外協力隊
駒ヶ根	147	21	16	0
二本松	183	—	9	—

つぶやき

お題 ▶ 原動力



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

子どもたち

「活動に行きたくない」。そんな日もある。学校の敷地内にある我が家。登校してきた子どもたちのにぎやかな声が響く。「あかん、行かな!」。家を出て見つかるや否や「おはよう」の嵐。『先生、昨日タロイモ買ってたな!』『うわ!見られた!』。私の原動力、子どもたちの声、笑顔。「よし、今日もやっつたよ!」

ペンネーム：家の壁薄すぎさん(女性) 協力隊員(大洋州・小学校教育・2017年度派遣)

★風に吹かれて

活動が思い通りに進まずモヤモヤしていた時期、ずっと隣に座って「先生どうしたの? 疲れてるの?」と声をかけてくれた子どもたち。彼らの何気ない優しさが、知らず知らずのうちに溜め込んでいた悩みや疲れを吹き飛ばし、私の背中を追い風となって支えてくれました!

ペンネーム：やったんさん(男性)
協力隊経験者
(中南米・小学校教育・2015年度派遣)

★★優しい村人

任期中に要請内容のプロジェクトが終了。やりがいを失っていたとき、思い出したのはプロジェクト先の村で活動した日々。村にやって来たものの何もできないただの若造に、山菜の取り方や怪我に効く薬草のことなど教えてくれ、夜な夜なお酒を酌み交わし共に踊り歌った村人たち。優しくしてくれたこの村の人たちのために少しでも恩返しをしたいですね。

ペンネーム：
村から帰って飲むモヒート最高!さん(男性)
協力隊員(アジア・コミュニティ開発・2017年度派遣)

★★★感謝の言葉

何をしても良いかわからず、言葉もままならない赴任直後。配属先の保健センターでぼーっとしていると、歩くのも辛そうな患者さんがバイクタクシーから降りてきたので、腕を支えて一緒に歩き、ベッドに寝かせ、スタッフを呼びにいきました。その後の経過は知らないまましばらく経ち、地域での活動を始めたころ村で声をかけられました。「あのときはベッドまで連れて行ってくれてありがとう」。活動がほとんどできていない中でいただいた感謝の言葉が嬉しく、やる気が出たのを覚えています。

ペンネーム：カバディさん(男性)
協力隊員
(アフリカ・感染症・エイズ対策・2017年度派遣)

募集中のお題

「質問」「リフレッシュ」

投稿は『クロスロード』編集室まで
(P35をご覧ください)

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?



CROSS YELL!!

—先輩隊員からの置き土産—



新たな取り組みの意義が理解されず、 ひとりで奔走していました。

ゆいみほこ
文=由井水帆子さん

- ▶ エクアドル
- ▶ 青少年活動
- ▶ 2017年度2次隊

PROFILE

1987年生まれ、愛知県出身。公務員を経て、2017年10月、協力隊員としてエクアドルに赴任。19年10月に帰国予定。

活動概要

キト市役所(キト市慈善財団)に配属され、薬物依存症更生施設で主に以下の活動に従事。

- 入所者に対する生活指導や日記指導
- 入所者の社会復帰支援家庭訪問や家族に対するワークショップの開催など

私の活動先は、薬物依存症の更生を目的に未成年男子が入所する施設です。着任してすぐに感じたのは、入所する少年たちに「自らの更生過程に向き合う時間」が不足していること。そこで、着任して3カ月が経ったところに「日記」の指導を始めました。少年たちが気持ちを吐き出すだけでなく、自らの更生過程を見つめ直す手段になるうえ、彼らの変化を同僚の職員たちが汲み取れる手段にもなると考えたからでした。

ところが、「日記を書く」という習慣がなかった少年たちは、書き始めても集中力が持ちません。また、配属先には明確な「時間割」がなかったため、日記を書くことに専念させる時間を確保するのも難しい。そんな状態であるにもかかわらず、同僚たちは「ミホコが始めたこと」と協力には消極的であったため、「これではだめだ」と考え、日記指導は中断しました。

その後、再開の余地を探るために同僚との話し合いを試みましたが、光明は見えず、「うちの少年たちには無理だ」といったあきらめの意見さえありました。

転機となったのは、JICA事務所の協力により、日記指導を行っている他の類似施設を同僚たちが見学する機会を得たことでした。その経験により、同僚たちは日記指導に関する具体的なイメージを持つに至り、配属先で実現する方法についてあらためて彼女たちと話し合うことができました。

その後まもなくに行われたJICA事務所の中間報告会では、出席していた同僚が「日記指導を再開する

と宣言。すぐさま「日記指導」の時間が設けられて再開が実現し、同僚たちが自分事として取り組んでくれるようになったのでした。

当初、私はひとりで日記の件を抱えて奔走し、失敗してしまっただけですが、今振り返れば、その奔走を同僚たちに見てもらっていたからこそ、他施設の見学で日記指導に関する気づきを得てくれたのだと思います。



ひとりで悩まずに、 思い切って誰かを頼ってみる!

活動でうまくいかないことがあったとき、拙い言葉でも必死に思いを伝えようと、同僚が受け止めてくれたり、JICA事務所の人や隊員仲間が助け船を出してくれたりしました。気持ちが閉鎖的になってしまうこともあると思いますが、そういうときには「頼る、甘える」という姿勢も大事なのだろうと思います。



少年たちが集中して日記を書く様子を、同僚の職員とともに見守る由井さん(右から2人目)



今月号の表紙
セルビア



さとうせつこ
文=佐藤節子さん

(SV/セルビア・日本語教育・2016年度2次隊)

写真は、私が日本語教師として活動したベオグラード語学高等専門学校の日本語専攻の生徒たちです。「日本語を学ぶ」という中には、日本の文化や歴史、日本事情などを知るといふことも含まれます。生徒たちは、月に一度の日本文化体験のクラスを心待ちにしてくれました。書道クラスもその一つです。自分の好きな漢字を選び、初めて持った筆で皆、真剣に取り組み、書き上げました。満足の笑顔が作品と共に輝いています。